合がある。けれ共神の律法はそうてない。世の中が腐敗して居るから、自分も腐敗してよいと云はぬ。他人の品格の低いために、自己の品格の低いとは遁辭とならぬ。他人が惡いことをしたからといつて、それが爲め自分の罪が減るものではない。御覽なさい、基督は爰に一人の婦人が甚だ恥づべきことをしたからとて、學者やパリサイの人の罪は赦さるゝとは申されない。其良心に訴へて各をして恥辱の念に堪えざらしめたのだ。我等も願くは、今一層神の律法の嚴なることを思ふて、他人に比較して自ら恕し、人を罪して自ら免れんとするとのないやうにしたいものてある。も一つの事は我等は神の律法の前には決して人を罪することが出來ぬといふ事を、今一層能く學びたいものてある。『爾曹の中罪なき者先づ石にて彼を擊つべし、』世の中には隨分自分計り義人てあるかの如く、筆や舌て社會の腐敗を罵り、他人の罪を責めて快とする者がある。併し社會の腐敗するは、社會全躰の責任で、自分も其社會に居る以上は、其腐敗の一分子に相違ないのてある。教會の中抔には自分一人義人の如くに、他の信者や牧師抔を罵り、人の罪を責めて快とする人々が少くないのてあるが、自分も其教會の中に居るならば、均しく其罪を分たねばならぬのてはあるまいか。社會は人間の寄り集りてあるから腐敗もしよう、教會も人間の寄り集りてあるから墮落する人もあらう。併し社會や教會やを罵る人は果して眞に罪のない人々てあらうか。罵る權利のある人々てあらうか、學者やパリサイの人々は、罪を犯せる婦人を責むる權利があると思ふたが、基督はイヤ待て、汝等罪なくば石にて擊つべしと云はれた。大抵の人は中々人の罪を責めたり、人の惡を罵る權利がないのてある。我等は兎角自分の事を考へずに、人の罪を責めたがるものてあるが、神の律法は之を許すものてないと云ふ事を考へるやうにしたい。一躰社會を矯正する事や、教會の風儀を直すとや、墮落する人を救ふ事は、其罪を責めたり罵るとてはない。寧ろ自分も其責任を分つて己を責め、己れ自ら清く正しくしてゆく事てある。基督を見よ、彼自らは罪がないけれ共、社會の腐敗を見て其腐敗を罵らない、否彼は罪人の

友となつて、罪人に同情を表し、人の罪を見ては自己の罪の如くに感じて、自ら責め自ら傷み玉ふた。基督が罪を購ひ玉ふたと云ふのはそれである。我等は人の罪を責むる權利はないのであるから、人の罪を見ても之を責むる代りに、自己の罪の如くに之を痛み悲むやうにするならば、教會も社會も自ら清まつて來るのである。自分が清まらぬといふのも、つまる處は我等各々が自ら責むることが足らぬ、自ら責むる代りに、他人を責むるからである。どうか私共はパリサイ人や學者の心を棄て、基督の贖罪の精神を會得したいものである。

善き人と有用なる人と

全からんことを思はゞ往て爾が所有を賣りて貧しき者に施せ（馬太傳十九章廿一節）

善き人と有用なる人とは同一でない。クリスチャンは善人であればそれで宜しいのであるかと云へば、余はそう思はぬ。否聖書はそう敎へて居らぬ。クリスチャンは善人であるばかりでは不十分である、善人以上有用の人でなければならぬ、是れが聖書の敎であると思ふ。更に進んで此事を說て見ませう。

余の爰に善人と云ふのは先づ第一道德の人といふことである。道德の人と云ふのは、云ふ迄もない、自ら潔くして道德の敎を能く守る人をいふのである。若し爰に父母に對しては能く孝養を盡し、人に對しても不義理不人情をなさず、酒を嗜まず、色を好まず、虛僞を言はず、職務を怠らず、自ら持すると極めて嚴正なる人があるとするならば、之を稱して道德家といふであらう。此道德家即ち善人である。併し此人が若し是れ丈であるならば、善人と云ふことは出來ても、有用の人と云ふことは出來ぬ。道德家と云ふことは出來ても、クリスチャンと云ふことは出來ぬ。此事は基督の許に來て『我れ限りなき生命を得んがためには何の善事を爲すべきか』と尋ねた青年の物語に於て、明白に敎へられて居ると思ふ。此青年は基督に答へて、舊約聖書に定められたる道德上の戒は、いとけなき時より守つて居る、何の缺けたる處が我にあ

るかと云つて居る。疑もなく此青年は道德家である。從て善良なる人に相違ないので、基督も慥に之を認められて居つたと思ふ。而かも尙彼がクリスチャンとなるとが出來なかつたのは、何が爲めであるかといふならば、彼は善人であるけれ共、有用の人となることが出來なかつたからである。『爾尙一を缺く、全からん事を思はゞ往て爾が所有を賣りて貧者に施せ』と基督の云はれたのは、唯慈善の必要を敎へたばかりではない、自ら持すると嚴正にしてよく道德を守るばかりでは未だ不十分である、進んで社會の有用なる人とならなければならぬと云ふことを敎へたのである。夫の基督の時代に在て、勢力を振つて居つたパリサイ宗の人々は、惡人といふのではない、寧ろ善人である。律法の上に律法を加へ、戒の上に戒を加へて之を守らんと務めた人達で、一言を以て之を云へば、彼等は頗る道德的である。ジョセフアスといふ猶太の歷史家は、パリサイ派を希臘のストイック派に比して『彼等は奢侈婬逸に流れたることなし、彼等は最も質朴にして節儉なる生活をなしたり、彼等は其理性の善と認むる所に從て行ひたり』と云つて居る。而かも尙彼等が基督の叱責を蒙つたのは、何が爲であるかと云へば、彼等が自ら守ると頗る嚴正でありしに拘はらず、社會に對して無用の者たるに過ぎなかつたが爲めである。故に基督は彼等を責めて『任へ難き荷を人に負はせ、自ら指一をも其荷につけず』と云はれた。基督敎は唯善人を造くるのが目的ではない、寧ろ有用の人を造くるのが目的である。故にクリスチャンなるものは、唯道德的であると云ふ事を以て滿足せず、唯自ら潔くするといふ事を以て滿足せず、人にも世にも有用なる人とならん事を心掛けねばならぬのである。

次に余の爰に善人といふのは、俗に嘲弄の意味を以ていふ所謂聖人て、其精神と云ひ、其行爲と云ひ、殆ど缺點がないと云つてもよいのであるが、如何せん此人甚だ世間の事情に通じない、且常識に乏しいので、實際の世界には有用でないといふ人をいふのである。人に欺かれるといふ事は、實は其人の心の淸い事を顯はすので、

或意味からいへば寧ろ稱讃すべき事てある。昔鄭の子產に生魚を饋る者があつた。子產は校人をして之を池に蓄はしめた。然るに校人は之を煮て食つて仕舞つて、子產に復命して、『始め之を舍つるや圉々焉、少くすれば則ち洋々焉、悠然として逝く』と云つた。子產は之を聞て『其所を得たる哉、其所を得たる哉』と云つた。校人出て、『孰れか子產を智也といふ、余既に烹て之を食す、云く其所を得たる哉、其所を得たる哉』と云つたといふ物語は誰ても知つて居る話てあるが、子產が欺かれたといふのは、君子の心を以てしたからてあつて、君子は欺くに其法を以てすれば、欺かれる者である。併し實際の世界は君子の寄り合ではない、自分が君子てあるから、人も君子てあると云ふやうに思つて、世を渡らうとするならば、世の中には寧ろ無用の人となつて仕舞ふのてある。今より凡そ二百年前並河天民といふ學者があつたが、一日門人相集つて謂て云く、『先生若し志を得ば吾儕をして何事を管せしむ』。座に一人あり、曰く、『余の不才先生の素より知る所、但倉廩を守らば則ち一掬の米と雖も敢て之を私せず』と。天民云く『爾が如き者をして奈何ぞ倉廩を守らしめん』と。其人色を作して云く、『先生余を以て廢ならずと爲すか』、天民笑て云く、『否、物を竊むの才ある者、人のために竊まれず、爾能く人の爲めに竊まれざらんや』と。物を竊むの才ある者初めて人に竊まれず』といふのは、或は極端かも知れぬが、實際の世の中に有用の人とならうと云ふならば、人情と云ふ者を知らなければならぬ、人性といふものを知らなければならぬ。自分の心が潔いから、人の心も潔いといふやうに思つて事を爲すならば、人に馬鹿にせらるゝのみてはない、人に欺かれて却て大失敗を招くのてある。御覽なさい、基督は猶太人が多く彼を信じたりしに拘はらず、彼は彼等を信じ給はなかつた。『蓋凡ての人を知り、又人の心の中を知るが故也』と聖書は明に記して居る。學者や祭司の長が、色々基督を陷穽に陷さうとして試みたが、基督は其都度々々彼等の奸策を敗て、其陷穽に陷るを免れたのは、彼が深く世を知り人を知りたるが爲めてある。基督は其弟子を遣はすに方て、『我れ爾曹

を遣すは、羊を狼の中に送るが如し、蛇の如く智く、鳩の如く柔和なれ』と云はれたが、我等が此世の中に在るは狼の中に在るやうなものであるから、此間に立て福音を傳へ、神の榮光を顯はし、又同胞人類の間に善を爲さんとするには、よく世を知り人を知り、賢く立ち回はらなければならぬ。唯柔和しい人であれば宜いと云ふのではない、又思慮分別のある賢い人とならねばならぬのである。

最後に、世の中で通常善人といふのは、主義があるのではない、主張があるのではない、唯あたりさわりのない、所謂八方美人的の人を云つて居るのである。而して世の中の人は、斯ふいふ人を好む。學校であるなら、其生徒の自由になるやうな校長や、教師を善い人であると云つて好む。官廳であれば屬官次第であると云ふやうな人を、善い人であると云つて好む。其好むのはつまり自分の都合がよい爲めであるが、併しこういふやうな善人が、社會に重ぜられて居る間は進歩も改良も出來ない。基督教の重ずる人物はそういふ善人でない。主義あり、主張あり、喜ぶことを知り、怒る事を知る人である。基督が『然り、然り、否、否と云へ、是れより過ぐるは惡より出づる也』と云はれたのは、即ち主義主張の必要を述べたので、是れの出來ぬ人は弱き人である。弱き人も善人となるとは出來るけれ共、有用の人となるとは出來ぬ。唯に有用の人となるとが出來ぬのみでない、屢々有害の人となるとがある。創世紀に書いてあるイサクの物語を讀んで見ると、彼は善人であつた。けれ共唯善人であるといふために、其妻と其子ヤコブとに欺かれて、其子エサウから家督の權を奪て、ヤコブに與へねばならぬといふやうになつて、家庭の波瀾を惹き起し、親子離散をすると云ふやうな悲慘の狀態に立ち至つたのである。又祭司エリは甚だ善人であつたが、是れ又主義の人でない、是を是とし非を非とし得る人でなかつたために、其子の惡しき事を爲すを知て之を止むると能はず。爲めにイスラエル人はペリシテ人の爲めに戰ひ敗れ、其二子は戰死し、自らは祭壇より落ちて、頸折れて無慘の最後を遂げたといふ物語が、サムエル書の初めに記されてある。如何に善人

ても是を是とし非を非とし、罪を怒り不義を止むる力がなければ、有用の人となると能はざるのみならず、屢々有害の人となることがある。夫の豫言者と云ふのは、イサクやエリの樣な善人ではない、王者を恐れず其前に直言して憚らなかつた人である。人民を恐れず、叱咤して其罪惡を責めた人であるイザヤも、エレミヤも、アモスも、ヨエルも、エリヤも、バプテスマの約翰も、此の如き人である、基督の事はいふに及ばず、宗教的改革家といふ者も是々非々の人である。ルーテルも、ウエスレーも、カルビンも、ノックスも、獅子の吼ゆるが如く大聲疾呼して王者と云はず、人民と云はず、其時の罪惡を責めたのである。クリスチャンと云ふのは、やはり此ふいふ意氣があるものでなければならぬ。敵もない、味方もない、是を是とし非を非とするとも出來ぬ樣では、到底家庭にも、學校にも、教會にも、官廳にも、社會にも、有用の人となることは出來ぬのである。どうか我等は、善人と有用の人との間には區別があるものである、而して基督教は善人を造ることを以て滿足するものでなく、有用の人を造くることを以て目的とするものであることを記憶して、善人たる上に、更に有用の人となる樣に心掛けたいものだと思ふ。

聞かるべき祈禱

誠に實に爾曹に告ん、凡て我名に託りて父に求むる所のもの父之を爾曹に授け給ふべし（約翰傳十六章廿三節）

是は耶蘇が世を去らんとするに臨み、弟子等に告げ給ふた言の一節で、祈禱の必ず聞かるべきことを確證せられたのである。祈禱をしても、それが聞かれるか、聞かれぬか分らぬならば、祈る張り合がない。けれ共基督は其他の事に於ての如く、此點に於ても曖昧な事は仰せ給はぬ。判然明白に、爾曹の祈る處の事は神之を聞き給ふべしと仰せられたので、此言の中には一點の疑惑もないのである。又之れより外に之を解釋する道もないのである。然るに實際に於てはどうであらう。我等の祈りたる祈禱は悉く聞かれたであらうか。勿論我等は我等の祈禱が屢々聞かれた實驗をも

つて居る。或時は神は我等が祈つたよりも、多くを聞いて下さつたと思ふ事もなかつたのてはない。けれ共概して云へば、我等の祈禱は悉く聞かれたといふのてない、のみならず其多くは聞かれなかつたのてある。兎角人は物に慣れ易いもので、或人々は習慣的に祈禱を捧げる、いくら祈禱を捧げても聞かれない、聞かれないても習慣となつて居るから、毫も之を怪しまないて、やはり祈て居るものがある。併しも し我等がこういふやうになるならば、祈ても祈らんても違がないから、長い間には祈禱をするとも止めて仕舞ふやうになるので、誠に危険な事てある。祈禱が宗教上どれ程大切てあるか、それは爰に述ぶる迄もないが、基督が斯く明白に、祈禱の必ず聞かるべき事を約束せられたるに拘はらず、實際に於て、我等の祈禱が屢々聞かれぬといふのは、どういふ譯てあらうか。是は大切な問題て、我等決して輕々に看過すべきものてないと思ふ。

基督の此言は、祈禱をすれば、其祈禱が何ても聞かれるといふのてはない。基督の名に託りて祈るならば、其祈禱が聞かれるといふのてある。『我名に託りて父に求むる』と云ふ此言が、此一句に於て最も大切てあつて、是れが聞かるべき祈禱の條件てある。凡ての祈禱は、條件なしに聞かれるといふのてはない。基督の名に託りて祈る祈禱のみが、聞かれるといふのてある。斯く云ふならば、凡て基督信徒は誰ても基督の名に託りて祈るので、我等は何時ても祈禱の終には『基督の名に託りて聞き給へ』と附け加へて居る。我等の祈禱に、未だ基督の名に託らずして祈りたるものはない、けれ共其祈禱に答がないものがあるてはないかといふものがあるてあらう。余の言はんとする處は即ち其點て、我等は果して『基督の名に託る』といふ言の眞意を知つて居るてあらうか、何の意味もなくして、唯習慣的に此言を使用して居るのてはあるまいか。

『基督の名に託りて祈る』といふのは、基督の中保に依つて祈るといふ意味てはない。我等は直接に神に近くとが出來るのてあるから、祈禱をするに中保を要する筈はな

い。故に基督も自ら『我れ爾曹の爲めに父に求ふと曰はず、蓋父自ら爾曹を愛すればなり』と仰せられて居る。それなればどういふ意味であらうといふと、一言に云へば『基督と同じ心を以て』といふことになるであらう。基督を自分の地位に置いて見て、基督もし此場合に處し給ふならば、斯くの如く祈り給ふであらうといふ處を祈るのである。更に言を換へて云へば、基督の祈る處を祈るのが、『基督の名に託りて』必ず天の父は、基督の祈禱に答へ給ひし如く、我等の祈禱にも答へ給ふので、無益の祈禱といふものはないのである。然らずして唯何の考もなく、『基督の名に託りて』祈るといふのは、唯言語の上のみであるといふならば、是れ基督の名を潛用するもので、實は恐れ多い事になるのである。日露開戰以來露國の皇帝は頻りに戰勝を祈られたといふとて、毎日澤山の時間を祈禱のために費して居られたといふことである。彼は云ふ迄もなく、其祈禱の終り毎に『主イエス、キリストの名に由りて聞き給へ』と附け加へて居つたに相違ない。けれ共彼が熱誠の祈禱は終に聞かれなかつた。是が爲めに基督の約束は遂げられなかつたと云ふべきであらうか。決してそうでない、露國皇帝は眞實の意味に於て『基督の名に託りて』祈つて居るのでない、唯自己の名を以て祈つて居るのみで、祈禱の終りに附加へる言は無意義の言に過ぎぬのである。何ぜなれば、基督がもし露國皇帝の地位に居らるゝならば、決して日本と開戰するやうな事はせぬ、露國皇帝のする事は勿論凡て基督の爲さるべき事ではないからである。が、どうてあらう我等が祈禱をする時に、『基督の名に託りて』聞き給へと祈り乍ら、基督の爲し給はざるとをなし、言ひ給はざる言を云ふやうな事はあるまいか、祈禱が聞かれないのみではない、凡て我等の爲す事の多くが成効せぬ、樣々の事に失敗があるといふのは、何事も眞實の意味に於て基督の名に託りてせぬからである。

於是我等は基督の教訓殊に其生活を學んで、凡ての事に於て基督の歩むが如く、歩

む必要があるのであるが、爰には唯祈禱の事に就て、基督の名に託りて祈るといふには、どうしたらよいであらうかといふ事に就て、一二の要點だけを摘んで述べよう。

先づ第一は何を祈るかといふことであるが、凡そ何事を祈るのでも、先づ基督は斯の如き事の爲めに祈り給ふてあらうかと考へねばならぬ。基督が祈禱の模範として敎へられた主の祈禱を見ると、『我儕に日用の糧を今日も與へ給へ』と云ふ事の外は、何れも精神的の事である。我等は勿論物質上の慰安の爲めに祈つて差支はない。けれ共精神上大切の事を第二にして、單に物質的の慰安を求むるのは、基督の爲し給ふ處でない。『爾曹先づ神の國と其義とを求めよ、去らば其他の事は之に加へらるべし』と基督の仰せられた言は、常に我等の服膺すべき處である。

次には何の爲に祈るかといふことである。世の中には祈禱の眞意を誤て、祈禱とは神の意を曲げて自己の意を遂げんとする者であるかの如く思ふものがある。けれ共基督敎の祈禱は決してそういふものでない。寧ろ自己の意を曲げて、神の聖意に從はしめやうといふのが祈禱の眞意である。基督の祈禱はそれであつた。即ち彼はゲツセマヂの園に於て『去れど我意の儘を爲さんとに非ず、聖旨の儘になし給へ』と祈り給ふた。神の聖意を學んで之に服從しやうと云ふ精神を以て祈るのが、『基督の名に託り』て祈るのである。

併し基督の祈禱は絕望的ではなかつた、寧ろ勇猛なる祈禱であつた。十字架上で『我神我神何ぞ我を棄て給ふや』と祈り給ふたのは、絕望したのではない、人事の盡せる丈けは人事を盡して、而して後天命に從はんといふ勇猛の精神を顯はされたのである。自分の盡すべき處をも十分盡さないで、運である、天命であるといふやうに、早くあきらめをつけて仕舞ふのは、基督の精神であるとは思はれぬ。基督の御生涯を見ると、天父を信ずる信念は實に深く、常に天命に安じて居られたけれ共、人事を盡さずして、唯神の助を求むるといふ事はなさらなかつた。彼は傳道の初に、惡

魔が『爾神殿の頂より己を投げよと』云つた時『主たる爾の神を試む可らずと錄されたり』と云ひ給ふて、其試惑を退け給ふた。又曾て惡しき裁判人と失望せざりし寡婦の喩を以て、沮喪すまじき事を敎へ給ふた。此等に依て見ると、何處迄も運命と角闘して、人力のあらゆる力を盡し、而して神に祈るといふことが基督の御精神であつた。此精神を失はずして神に祈る、是れが眞の意味に於て『基督の名に託りて』祈るといふ事である。此の如くして祈る祈禱は必ず聞かれるのである。然らざれば『基督の名に託り』といふのは空言となつて仕舞ふのであるから、我等はどうか此言の眞意を失はぬやうにしたいものである。

復活に於ける緊要と不緊要

血肉は神の國を嗣くこと能はず（哥林多前書十五章五十節）

基督が十字架に釘けられ、死して葬られ、三日目にして蘇り給ふたといふことは聖書の記事で、昔から基督敎會の信じ來つた處で、基督敎會の信仰の中でも、最も大切な信仰の一として考へられて居つた。使徒保羅（パウロ）は『キリストもし甦らざりしならんには、爾曹の信仰は空しく、且罪に居らん』と云つて居るが、此等の言から、基督敎の信仰は、基督復活の信仰と存亡を共にするものであるかのやうに思はれて居つた。そして基督の復活といふのは、無論肉體の復活で、『空虛なる墓（エムプチー、ツヴム）』を信ずるのが、即ち基督の復活を信ずるのだと信ぜられて居つた。然るに第十九世紀の終に至て、科學的思想が非常に發達して來て、萬事を科學的に說明せんとし、科學的の說明が出來ぬものは、之を排斥してしまうといふやうな傾になつて來ると共に、此復活といふ事も、從來の說明では滿足が出來ぬので、色々な說明が出て來た。即ち或人は、弟子等が基督を慕ふの餘り、其姿を幻に見たのであらうと云ひ、或人は、基督は慥に弟子等に顯はれたに相違ないが、其顯はれたのは靈であつて、つまり靈的顯現に外ならぬのだと云ひ、又或人は、基督は實際死んだのではなかつた、一時氣絕した

のであつたから、再び墓の中から出て來られたのだといふのである。之と共に他方に、聖書の歴史的批評が盛になつて、聖書の記事から、果して使徒等は基督の肉體的復活、即ち『空虚なる墓』を信じて居つたのだらうか、こふいうやうな信仰は稍後代に至て發達したのではなからうかといふやうな事を、こんどは歴史的に研究して、或學者は、肉體的復活の眞僞は兎に角、初代の使徒等は此の如く信じたに相違ないと云ひ、他の學者は、初代使徒の信仰は靈的復活に止まるので、之を肉體的に解釋したのは、稍や後世の事であると云ひ、又他の學者は、何處迄も保守説を取て、使徒等が斯く信じたるはいふ迄もない、今後も斯く信ぜなければ、基督教の土臺が壞れるといふやうに言つて居る。是は今日基督復活に關する學者間の議論の有樣であるが、爰には此等の議論に就て、詳細の事を述ぶる暇がないのみならず、學者間の議論は暫らく學者の研究に任せて置いて、我等は實際の教訓を得るのが大切である。基督の復活は肉體的であつても、精神的であつても、又歴史的であつても、非歴史的であつても、それはあまり必要の事ではない。從來の教會はこういふ事にアマリ重を置いて、實際大切の事を忽にする傾があつたのだが、我等は此邊に就て少し心を大くもつて、更に大切の處に目を着くるやうにしたいものである。

去らば更に大切の處とは何であらうか、余の思ふ處では『主實に甦れり』といふとよりも『主實に生く』といふとであらうと思ふ。基督がどういふやうに甦り給ひしか、肉體的であつたか、精神的であつたかといふとは、宗教上關係する處寧ろ僅である。保守的の神學者は『空虚なる墓』といふとに重を置く、進歩派の神學者は基督が肉體的に復活し玉ふた證據がないといふ。何れでもよいではないか。基督は死せる基督に非ずして、生ける基督であるといふとが慥であれば、差支ないではないか。基督世を去りて一千九百年、基督の精神は生きて人類の間に働き、其歴史を改造しつゝある。此事實は誰も疑ふとは出來ぬ。『我は世の終まで爾曹と常に在る也』と云はれた基督の言は、何人も疑ふとは出來ぬ、是れが大切の事實である。其如何にして甦り

給ひしかの如きは、抑も第二のことである。且保羅の教訓を御覽なさい。保羅は復活の基督を見て道に入つたので、基督の復活と保羅とは一種特別の關係があるが、其保羅は復活に就て何と云つて居るか。『兄弟よ我之を言はん、血肉は神の國を嗣ぐと能はず、亦壞る者は壞ちざる者を嗣ぐと能はず』と云つて居るではないか。是は一般の信徒に就て言つたことであるが、基督に就ても亦同じことではあるまいか。又彼は『爾曹バプテスマを受けて彼と共に葬られ、亦死より彼を甦らしゝ神の大能を信ずるに由て、彼と共に甦らされたり』(哥羅西二ノ十二)と云ひ、又『イエスキリストに在る我等を彼と共に甦らせ、共に天の處に坐せしめ給へり』(以弗所二ノ六)と云つて居る。此處にいふ復活は云ふ迄もない精神的の意味で、物質的の意味でない。此等の言に由て見れば、大切の點は寧ろ精神的で『空虛なる墓の』信仰よりも、『生きて天の處に坐る』といふことであるといふことが分るではないか。サドカイ宗の人は、蘇生に關して甚だ物質的の考を抱いて居つたが故に、蘇生を否定した。於是基督は其物質的の考を破て『神は死し者の神に非ず、生る者の神也』とのことを告げられた。基督の重ぜられた處も肉體の復活でない、精神的の復活であつたといふことが之に由て分るのである。

去らば我等は基督の復活を以て必ずしも物質的に解釋するに及ばぬ。其如何なる形狀に蘇り給ふたに拘はらず、彼は慥に蘇りて今も尙生きて居らるゝのである。而して是は、正義はどうしても滅すことが出來ぬといふことを我等に教へたのである。天地の間に正義の神があつて、正義を以て天地を支配して居るから、正義の神と共に在り、正義の神と合體するときは何人でも死ぬことは出來ぬ。假令一時死ぬるが如く見えても、そは一時の現象で、忽ち甦るものであるといふ事を教へたのだ。詩の第十六篇に『そは汝我靈を陰府に棄ておき給はず、汝の聖者を墓の中に朽ちしめ給はず』と云ふことがあるが、是は正義の神と共に在るものは、どうしても死ぬことは出來ぬ、正義を愛する神は、斯る者を長く陰府に葬らしむる譯がない、必ず之を蘇らしめ給

ふのだといふ信仰を歌つたものだが、此れが基督に於て最も著く顯はれたのである。ユダヤの宗教家等は、基督を殺して之を亡したと思つて居つたが、基督は之が爲に死なぬ、正義の神と一致せる彼は死ぬとが出來ぬ、彼は甦りて神と共に天に坐し給ふたのである。彼は永く生きて彼を信ずる者と共に在るのである。基督は其在世の時既に自ら『我は蘇(よみがへり)也、生命(いのち)也』と仰せられたが、基督の生活は決して死ぬとの出來ぬ生活、即ち蘇りであり、永遠の生命であつたのである。我等クリスチャンの大切なる點は、此死ぬとの出來ぬ生活、即ち蘇りの生活を我有にすると云ふとて、蘇りといふのは、我等が死後に肉體をもつて永く生きるといふとてはない、そんな物質的な考てはない、古き性質、古き思想、古き感情を棄て、基督の精神品格と一致して之を我精神品格となし、之を生長發展せしめて永遠に至らしむるのである。是れが大切の點で、もし之れが得られなければ、千九百年前基督が復活し給へりと信じたとて、何等の利益もないのである。

復活の生活と云ふのは、簡短に其特質を述べて見るならば、先づ第一『大なる生活(グレーター、ライフ)』である。永遠といふ標準から考へて來る、目前の利益や幸福から割出して來ない。例之基督の傳道法を見ても分るとてあるが、彼は當時ユダヤ人の歡心を買つて一時に道を廣むるとはせぬ。通常の人ならば、權謀術數を用ゐて人心を收攬し、一時の功を得ようとするてあらうに、彼は之をせぬ。當時から見れば全く失敗であるのに、尙『我已に世に勝てり』と云つて、永遠から打算した。斯くいふ生活は決して死なぬ、限界がないのである。之れが甦の生活の第一特質である。次に『高貴なる生活(ノーブラー、ライフ)』である。高貴なる生活といふのは、私慾のない生活である、一點私の念がない、自己を棄てゝ人の爲にする生活、是れ程高貴な生活はない。而して基督は實に此の如き生活をなし給ふたのである。此生活がどうして滅亡するとが出來やう。甦つたといふのは、即ち此生活の滅亡すると能はざるとを云つたのである。次には甦の生活は『自由(フリー、ライフ)の生活』である。自由の生活であるといふのは、凡ての罪惡の羈絆より脱した生

活といふのである。人は自分で自由であると思つて居るが、實は罪惡の羈絆につながれて居るのである。狐は鼠の油揚の香が鼻に入ると、あれを食へばわなに掛り、命を失ふと知りつゝ、之を食ふて命を失ふが、人も其好む物のためにわなにかゝる。即ち酒色、金錢の爲に生命を失ふ者が多い。是は甦の生活ではない。甦の生活は凡て此等の羈絆を脱して、どのやうなわなにも掛らぬので、即ちこふいふ生活は亡びやうがないのである、次には『強き生活』(ストロンガー・ライフ)である。義務の爲めには何物をも畏れぬ、天下を敵としても恐れぬ生活である。基督がラザロの病めるを聞て、ベタニヤに往かんとした時、弟子等はユダヤ人を恐れて『ラビ、ユダヤ人は近頃も石を以て汝を擊たんとせしに、復彼處に往き給ふか』と云つた。然るに基督は之に答へて『一日の中十二時あるに非ずや、人もし日間(ひる)歩かば躓くことなし』と云つて、ユダヤに向はれたが、是は義務を盡す時には恐るべきものなしとの意であらう。こういふ生活は、或は一時亡ぶる如く見ゆるかも知れぬ。けれ共此は唯一時で、決して長く滅ぶべきものでない。最後に今一のとは『富める生活』(リッチャー・ライフ)である。富めると云ふのは幸福といふ意味である。貧を貧とすれば愉快でない、けれ共貧を貧と思はねば、貧と雖も富んで居るので、幸福を感ずるのである。艱難を艱難とすれば、其重荷に堪えぬが、艱難を艱難と思はなければ、艱難も尙安樂である。保羅が『艱難にも尙喜を爲す』と云つたのは是で、こういふやうな生活は、何時迄たつても希望滿々で、肉體は弱はる事があらう、否死ぬ時が來るに相違ないが、其精神は何時迄も生きて居つて決して死ぬとが出來ぬ。是が甦の生活で、基督の生活は以上五の者を具備して居つた。是がどうして死ぬとが出來やう。是をどうして亡すとが出來やう。ユダヤ人が十字架にかけて殺しても、そは唯一時で、長く陰府に止るとは出來ぬ。直に蘇つて永遠に生きるのである。基督の復活といふのは、即ち此生活の永存を云ふので、彼の生活を我生活となす、是が我等に在ては、基督に在て甦つたといふのである。此生活が我等に必要なので、保羅が『血肉は神の國を嗣ぐと能はず』と云ひ、又『基督と共

に甦りて天の處に在り』といふのは、之を云つたのである。而して此生活を得るには、どうするのであるかと云へば、此生活の中に在るのである。ちやうど空氣の中に在る如くキリストの生命の中に居るのである。キリストは生命の水で、斷えず流れて居るといふ、其水を汲むのである。ちやうど水車のやうなもので、水が始終流れて來なければ水車は回轉せぬ。キリストが復活し給ふたと云ふだけの信仰は、水車の最初の衝動に過ぎぬので、是だけでは復活の生命を得るとは出來ぬ。基督は今も尙生きて居らるゝ、其生命の水を汲んで基督の復活の生活を分有するとが出來るのである。之れが基督の復活に於て、最も大切なとであると思ふ。

基督教徒の證據

主彼に曰けるは嗚呼善且忠なる僕よ、爾寡なる事に忠也、我れ爾に多きものを管らせん、爾の主人の歡樂に入れよ、(馬太傳廿五章廿一節)

基督教徒の證據はいくらもある、色々の方面から觀察するとが出來るのであるから、是れ一つさへあれば、基督教徒として十分の證據をもつて居るといふとは出來ぬかも知らぬ。故に今余の語らんとする處のものも唯一の證據といふのではない、けれども共最も大切なる證據の一である。此喩話は、神は如何なる標準に由りて人を估價し給ふかといふ事を述べられたものであるが、此中に基督教徒の證據が示されてある。日本譯に『銀』と譯してある原語は、元來目方を計る標準の意であつたものが、轉じて金錢の高を示す語となり、それから又轉じて、人の材能を意義する語となつたので、英語の才能(タレント)といふ言は、此れから出たものであるが、此言は適當に云へば、義務の範圍といふとで、五千、二千、若くは一千の銀を與へたといふのは、人は其才能に從て、夫々の義務職分を與へられたといふとである。而して神は、如何に人が其與へられたる、五千、二千、若しくは一千の銀を用ゐしかに從て、人を估價り給ふといふのであるから、基督教徒の證據は義務に忠實であるといふ事にな

る。『嗚呼善且忠なる僕ぞ、爾寡なる事に忠也』と神は仰せ給ふべしとある。世の終末てはない、日々の終末、否寧ろ時々刻々自ら顧みて、此神の言を受くるに値して居るならば、我等は基督教徒の證據をもつて居るのである。

偖爰に『寡事』とあるが、一タレントの銀は日本の今日の相場に換算すれば二千圓になるといふから、五タレントの銀は一萬圓になる。二千や四千や一萬の銀は大金てはないが、是が其與へられたる凡てであるとすれば『寡事』ではない、人生に取ては寧ろ大事てある。然るに之を『寡事』と云つたのはどういふ譯てあらうか。又『寡事』といふのは元來どういふとてあらうか。余の思ふ處に由れば、『寡事』といふのは此世に於て我等がなすべき職業のとで、之を殊更『寡事』と云つたのは、永遠の事業に比したからてある。此處に『我れ爾に多くのものを督らせん』とある。之に由て見れば、我等の事業は此世を以て終るべきものてなく、更に大なる事業があるのてある。此大なる永遠の事業に比すれば、此世の中の職業は寡事てある。曾て滿洲の野に、五十萬の軍の總指揮官として、一國の運命を其勝敗に賭して居つた大山大將の任務は中々重いものだが之を永遠の事業に比すれば寡事てある。其領地内に曾て日の沒したとがないといふやうな、大きな帝國を支配して居る英國皇帝の責任は、實に大したものだが、是れさへ永遠といふ眼から見れば、寡事に過ぎぬのてある。我等は自己の職務に對して、二箇の異つた思想が必要てある。一は之を以て重いと感ずるとてあるが、是は後のお話として次に必要なのは之を寡事と思ふとてある。假令どのやうな重い職務ても、又どのやうに爲すべき事が多くあつても、之を永遠の事業に比すれば、寡事てあると思ふとが必要てある。なぜなれば我等に此思想がなければ、我等は中々此世の中の多くの仕事や、重い義務に堪えぬのてある。世の中には、僅かばかりの仕事を非常に重く感じて、直に疲れ果てる人が多い。マルタは基督をもてなさんとして心入り亂れ、マリアの手助せざりしを怨んで、基督に向て怨言を放つたといふとだが、マルタばかりてはない、多くの婦人は、多端に由り思ひ煩ひて心づ

かひをする。良人の機嫌も取らねばならぬ、小供のもりもせねばならぬ、食物の調理や、衣服の裁縫や、汚れ物の洗濯や、並大抵の事ではない、此外お客も來れば、自分も人を訪問せねばならぬ、親類のつきあひもあれば、時には又人の世話をもせねばならぬ、其處て、どうも是てはやりきれぬ、是ではとてもたまらぬといふやうに思つて、苦情を云つたり、つぶやいたり、つい叱らずともよい小供までも叱るやうな事があるものだが、此時是は寡事てある、永遠の事業に比すれば些細の事に過ぎぬと思つたら、もうつぶやくにも及ばぬ。是れ迄重い荷物だと思つたものも、やす〳〵堪ゆることが出來るのてある。是は家を持つて居る婦人ばかりてはない。誰ても自分のする事が、都合能くゆかなかつたり、人に彼此云はれたりするやうな場合には、其重荷に堪えないて、早く其職を去り其務を棄てゝ、閑散な容易な地位に退きたいと思ふものてある。水戸黄門光國卿が。『位山登りてつちき老の坂、麓の里ぞ住みよかりける』と歌ひて、大納言の職を退き、西山に退隱したのは、即ち此人情を顯はしたものて、如何にも同情に堪えぬ事だが、もし『寡事』といふ思想があつたなら、如何なる困難にも堪ゆることが出來たてあらう。我等は弱き人間だから、我等に與へられたる職務を容易く盡すことは中々六かしい。けれ共此世に於て與へられたる此些細なる任務さへ盡し得ぬならば、如何て之よりも大なる者を督ることが出來やう。故に我等は先づ第一、此世の職業は其如何なる者なるに拘はらず、永遠に比すれば寡事てあるといふ思想をもつことが必要てある。けれ共之と共に、我等に與へられたる此世の職業は、決して粗末にすべき者てない、否全心全力を盡して忠實に之を爲さなければならぬのてある。『爾寡事に忠也』此忠といふことが我等の運命を定むる唯一の標準て、是れが基督敎の證據てある。前にも云つた通り、此『寡事』と云ふのは此世の職業のことてあるから、忠といふのは唯自分の奉ずる宗敎に對し忠てあるといふばかりてない、日常己の職とする所に忠なることてある。カライルは、職業は宗敎てあると云つたが、カライルばかりてはない、思慮ある基督敎徒の中には、職業と

宗教とを調和せしめんとした人々が甚だ少なくない。勿論職業其物は宗教ではないが、職業を爲す精神は宗教から來なければならぬ、否職業に對して忠なると夫れ自らは既に宗教であるのだ。余が今基督教徒の證據として、殊に爰に述べたいと思ふのは、此職業に對する忠實心である。兎角我等は宗教を實際の職業から區別して、宗教は唯宗教上の集會にのみあると思ふのだが是は誤である。『愚なる靈魂』といふ寓話に、『世の末日大審判の時の事、一人の蘇りたる靈魂が、いと落付たる態度にて主の許に來た。彼女は敢て大膽といふのでもなく、又傲慢といふのでもなく、唯地上に於る長き生活は、末日主のみもとに立つに足れりと想像したからしい。主は爰時の間熱心に彼女の顏を見つめ給ふて居つたが、やがて彼女に向ひ、『汝は誰なるか』と仰せ給ふた。靈魂は此お言を聞て、意外の事に膽をつぶしたらしく、ぶる〳〵震へ乍ら、『オ、我が親愛なる主よ、爾は妾を知り給はざるか』と云つた。主は答へて『否とよ、我は嘗て汝を知らず』と云ひ給ふた。憐れなる靈魂は更に『オ、我主よ我神よ、汝は妾を記憶し給はぬにや、妾は毎月曜日には聖書の研究會に臨み、毎火曜日には禁酒會に往き、毎水曜日には傳道の集會に臨み、毎木曜日には祈禱會に出席し、毎金曜日には婦人會に列席し、毎土曜日には貧民の集會へ出て、働を助け、毎日曜日には朝も夕も教會へ出席して主を禮拜したるものなるに』彼女は啜泣をしながら、終の數言をくりかへして、殆ど失望的の言を以て『オ、主よ汝は實に全く妾を記憶し給はぬにや』と云つた。主は答へて『靈魂よ、我が往きて汝の戸を叩けるとき、汝は何時も家に在らざりしに非ずや』と宣ふたといふことがある。婦人が宗教上の集會に出席するは、甚だ結構のとてあるが、家庭を持てる婦人が、良人や子供の事は顧みず、内を外へと奔走して、溫暖なるべき家庭が冷になるをも顧みざるは果して祝すべきとてあらうか。基督教と云へば、唯集會抔に出席するとのみのやうに考へ、家事を等閑にするは、一を知て未だ二を知らざるものてある。主は唯祈禱會や禁酒會の戸を叩き給ふのみならず、寢室の戸をも、庖厨の戸をも叩き給

ふのであるから、何處にても主に面する用意がなくてはならぬ。曾て或佛教の書を讀んだ處が斯ふいふ話があつた。昔者印度に一人の婦人があつたが、至てきりやう自慢で、常に鏡に向て己の顔を照し見て、喜んで居つた。然るに或日誤て鏡の背面を見た故、其美しき顔がうつらなかつた。其處て大に驚き、自分の顔がなくなつたと思つて、私の顔は何處に在るといつて、市中を探して歩いたが何處にもない。あまり疲れたものだから、木の下に暫く踞して休んで居つたが、不圖手を以て其顔をこすつて見たらば、顔は自分について居つたから、安心して家に戻つたといふのである。是は馬鹿らしい話だが、自分の職業をおろそかにして、唯宗教上の書物や、集會やにのみ宗教を探さんとするのは、自分の顔を市街で探さうとすると稍似て居りますまいか。クリスチャンの中には、教會の方面から云へば、誠に熱心て感心せざるを得ざる人てあり乍ら、其平生の職業から云ふと、之に對して不忠實てあるといふ人が少くないのてあるが、世間の人が基督教を判斷するには、多くこういふ處からするのだから、これては甚だ困る。基督教の證據は「爾寡事に忠也」といふ處に在るのだから、クリスチャンたる學生は、學問に對してクリスチャン以外の學生よりも更に忠實に、基督が諸君を書齋に訪ひ給ふた時にも、教場に訪ひ玉ふた時にも其處に居られるやうにしたい。クリスチャンたる婦人の方は、家事に對してクリスチャン以外の婦人よりも更に忠實にして、寢室にも、臺所にも、育兒房にも、其宗教を發見するやうにしたい。お芋の煮へたも御存じなく、お飯のこげたも御存じない樣では致方がない。こういふやうに凡ての職業に在る人が、其職業に忠實てあることがクリスチャンの最も大切なる證據の一つてあると思ふ。どうか此點に就て今一層注意してもらいたいものてある。

無名の弟子

此外多くの婦ありて皆其所有を以てイエスに供事たりき（路加傳八章三節）

無名の弟子

世間の人は世の所謂大人を謳歌し、世の所謂英雄豪傑を稱賛する者である。カライルは『世界の歴史は畢竟大人の歴史也』と云つて、英雄崇拜を皷舞致したが、人は生れ乍らにして英雄崇拜者である。人を動かすと能はざる抽象的眞理も、一たび大人物の生活、經驗となる時には世界を動かすものである。即ち世界は大人物の生活、教導に由りて導かれ、進歩し、發達する者て、世界は亦實に斯かる人物を稱讃し、其功業を歴史に載せて之を後世に傳へるのてある。夫の所謂新紀元（エポック）の創作者（メーカル）なる者は即ち此大人物で、彼等は社會に新光明、新主義、新生命を與へて、世界を一新するのてある。カライルが世界の歴史を以て大人の歴史也として、英雄崇拜を説いたのも尤の次第である。併し世界の歴史を作る者は唯大人のみて、其他の人々は之に關係なき者てあるかと云へば、素よりそうてはない。世には有名の英雄がある如くに、無名の英雄があり、歴史のページに其名を稱へられたる大人物がある如く、人に知られずして埋もれたる大人物があるのてある。而して此等の人々は假令赫々たる名はなくとも、有名の人々と共に貴き精神を以て、貴き事業を爲し世界の進歩、發達に貢献をしたのてある。

此聖書の言は即ち此眞理を明にしたものてある。基督が鄕邑を周遊（めぐり）て神の國の福音を宣傳へられた時、十二人の弟子も偕に從つた。又マグダラのマリヤ、ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、又スザンナ抔と云へる婦人も、基督の爲めに許多の便宜を與へたのてあるが、唯彼等のみてない、『此外多くの婦ありて皆其所有を以てイエスに供事（つかへ）たりき』と記されてある。基督が三年の間傳道を爲されて居つた時に、彼は如何にして其生活費を支へられたかと云ふことは、あまり人の注意せざる事てあるが、是は中々大切の事てある。戰爭でも人は唯戰鬪の事のみ考へて居るが、戰鬪と均しく大切な事は兵砧部の働てある。兵砧部の働が十分てなければ、戰鬪は出來ない。傳道も亦之と同じとてある。抑も基督が三年の間、東奔西走衣食の心配なく、傳道なさる事の出來たのは、何の爲めてあるかと云へば、之を解釋するは即ち此聖書の

言て、マグダラのマリヤ、クーザの妻ヨハンナ又スザンナ、其外名の知れざる多くの婦人が、其所有を基督に献げた爲めである。此等の婦人の名は、假令歴史のページに載せられなくとも、其功業は決して十二使徒に讓らぬので、彼等の献身の精神は十二使徒のそれと同じく神に受け入れられて、其名は生命の書に記されたのである。

發明の事でも世間の人はワットであるとか、エジソンであるとか云ふやうな大發明家の名は、能く記臆して、之を稱讃するのであるが、ワットやエヂソンがあゝいふやうな大發明をするには、之を助けて彼等をして其理想を實行せしむるやうにした幾多の職工、幾多の朋友があるのである。どんな大發明家でも、自分の仕事を助げてくれる助手、自分に同情を表して衣食の心配のないやうにしてくれる朋友がなければ、其事業を完成するとは出來ぬ。是等の助手や朋友は何と云ふ人であつたか、其姓名さへ世に傳はらぬのであるが、其人類の幸福に寄與した功は、名を知られた大發明家と同一であるのである。教育家の事を云へば、誰でもフレーベル、ペスタロッヂー、ホレス、マン等の名を擧げて、其功業を稱贊するのであらう。此等の人は實に大教育家で、教育上に與へた功績素より少くないのであるけれ共、もし幾多神を愛し小兒を愛する無名の教育家があつて、此等の人々の精神、理想を實行致しませぬなれば、假令彼等の理想がどんなに高尚であつても、實際教育社會には何の益もない事である。世に學力のすぐれた、品性の高い人々は、どういふ人々の教育を受けたのであるかと云へば、多くは小學校で名も知れぬやうな、而かも忠實な教師の教育を受けたのである。丁度一滴の雨露が小さな種を濕して之を成長せしむる如く、小さな力であると思つたものが實に大なる働を爲すのである。宗教改革の事を云へば、誰でもマルチン、ルーテルの事を擧げる。ルーテルは實に大改革家で、基督教會は實に彼に負ふ所多いのである。けれ共彼が宗教改革の事業を大成したのは、彼が暗黒の中に陷つた時、或無名の僧侶が彼の許に來りて『我は罪の赦を信ず』といふことを話した事に初まつたのである。ジョン、バンヤンが罪といふことを悟つたのは、

大説教家の説教を聞いた爲めではない、五六人の婦人が、バンヤンの休息して居つた窓の下で、之に就て語るを聞いたが爲めである。スボルジョンが悔改めたのも、大説教家の説教に感激した爲めではない。或メソヂスト教會の無名の地方傳道師の説教を聞いた爲めである。ルーテルをして宗教改革の事業を大成せしめ、バンヤン、スボルジョン等を悔改めしめた人々は、共に無名の人で、歴史のページに其名を留めて居らぬのであるが、其功業はルーテル、バンヤン、スボルジョンと同一である。日露の戰爭に依りて、東郷、大山、黒木、野木、奥の名は世界に響いて居るのであるが、併し此戰爭は此等の人々許りて出來たものでない、其下に幾多無名の將校士卒があつて、其忠勇なる働に依て連戰連勝を得たのであると云ふ事は殆と云ふ迄もない。左れば我等は徒に赫々たる聲名に眩惑せらるゝことなく、此無名の人々の功業を記憶し、之を稱賛し之に感謝することを忘れてはならぬのである。斯く論じ來りて爰に我等は二三の學ぶべきことがある。

一、大小といふものは、分量に非ずして性質に存するのである。結果に非ずして動機に在るのである。人は唯分量を見、結果を見るのみであらう。けれ共神は性質を見、動機を見るのである。例之此處に或る富豪が、公共の事業に向て百萬圓の寄附をする。彼の姓名は忽ちに世に傳唱せらるゝであらう。けれ共彼をして此寄附を爲さしめたものは、家に在る彼の妻で、妻の熱心なる祈と勸めと、又其高尚なる生活とは彼をして百萬圓を與へしむるに至つたのである。此事實は世間に知られないでも、神の前には知られて、彼女は彼よりも更に大なる報酬を得るのである。此事は基督が、レプタ二つを投げ入れた嫠婦に就て敎へられた言に由て明である。曾て或る米國の年少き婦人が、オハイオ大學を卒業して、或る有名の女學校から校長として招聘を受けた。又或る立派なる紳士からは、婚姻を申込まれた。然るに此婦人には、年老い且病める父があつたから、もし此婦人が他に嫁し、又は劇しき校長の務をするならば、誰も此のあはれなる老人を見て呉れるものがない。其處て此婦人は、

名譽ある校長の職をも、幸福なる婚姻の申込をも共に謝絶して、父の膝下に侍して之を看護し、一生を無名の中に送つたといふとてあるが、此無名の婦人は決して小なる者てない、又其事業も決して小なる者てない。其父に對する濃なる愛の心は、必ず神に計られて適當の應報を得るに相違ない。我等は偉大といふとは分量てない、性質である、結果てない、動機てあるといふ事を深く心に留めて、假令無名てあつても、高尚にして人の幸福となる事業を致したいものてある。

二、我等の小事と思ふ事が案外大事てある。ベーコンは『神は屢々最も細き金線を以て最も大なるものを繫きとめ給ふ』と云つた。保羅(パウロ)がダマスコに於て、猶太人に圍まれた時、遁れる事が出來ない。其處て其弟子等は夜に乘じて一條の繩により筐を石垣に吊り下し、保羅は之に依て難を遁れたと云ふ事が聖書に記してあるが、此時保羅の生命は此一條の繩にかゝつて居つたので、此繩の丈夫てあつたこそ誠に仕合てあつたのてある。若し錨の鎖が途中て切れるやうな事があるならば、船は暴風雨の爲めに何處かに漂はされ、之れが爲めどんな貴重の生命が失はれるかも知れぬのてある。去れば我等は小事てあると云つて、之を輕忽にしてはならぬ。世に小事と云ふ事はない、どんな大事が、小事と思ふ事に關係して居るかも分らぬと思ふて、凡ての事を忠實に丁寧にせんければならぬのてある。

三、今一つ、是は既に述べたことてあるが、無名なる人の無名の働が、屢々非常に偉大なる効果を生ずるものてあるから、我等は敢て偉大な事をしやうと思はないて、忠實に無名の働をなすべきてある。前云へる如く、バンヤンやスボルジョンの悔改めたのは、無名の人の働に依るのてあるから、我等は必ずしも大說敎家となるには及ばぬ。祈禱會の席上五分時の勸め、若しくは膝組の對話て、どんな人を悔改めし め得るかも知れぬ。オーガスチンの悔改めたのは、母モニカの祈禱てあると傳へられて居る。去れば我等密室に於て祈つたとが、どんな人を悔改めしめ得るかも知れぬ。ジョン、ウヰリアムスといふ宣敎師は、或無名の婦人に伴はれて或宗敎の集會

に往つたのが、宣教師となる志望を起した基てあると云ふことてある。去れば或る人々を勸めて教會に伴ひ來る事が、どんな大きな事業の基となるかも知れぬ。故に我等は假令之が爲めに、自分の姓名が世間に傳はるやうな事てなくとも、神の爲めに善事を爲したいものてある。

世の野心家なるものは、兎角大きな仕事をして、虛名を得たいと思ふ者てあるが、事業の大小や、世の評判の如きは抑も第二てある。どうか我等は以上述べたる事を十分味ひ、假令無名の人となり、無名の事業を爲すも、基督の名の爲めに忠實に之を爲したいものてある。

眞實は沈默す

イエス殿く之を戒め愼みて何をも人に告くる勿れ……と言ひて去らしめたり（馬可傳一章四十三節）

耶蘇は何が故に此癩病人に、其潔められたることを人に告ぐる勿れと戒められたのてあらうか。之に就ては聖書學者が、凡そ五六種程の解釋をして居る。其等の解釋は、何れも多少の眞理を含んて居るので、何れが眞に基督の精神を言ひ顯したものてあらうか、今日より斷言することは出來ぬ。けれ共此物語は、眞實に善事善行を爲す者は、之を語り傳へらるゝことを欲する者てない、自己の爲したる善事を自ら吹聽し、若くは吹聽せられん事を欲する者は、眞實の善人てないといふ事を、我等に敎ふる者てあると云ふ事は疑なきことてある。凡そ物には眞僞の二がある。余の友人に書畫を嗜む人があるが、此人の話に依ると、近時僞物の多いと實に驚く計りて、一幅二圓以上の直段のする品ならば、必ず僞物があるといふことだ。金には贋金があり、札には贋札がある。昔は贋首といふものがあつたと云ふことだが、今ても隨分贋首があつて、試驗の名代抔をやることがあるそうだ。其他僞大學生があり、僞女學生があり、凡そ物として僞物のなきものは殆どないといふ有樣てあるといふことだが、中々油斷のならぬ世の中てある。聖書を讀んだ方は、誰ても知つて居らるゝ通り、基督の

言の中に『僞善者』といふ言がある。此言の原語は、戲劇の假聲又は役者といふ言から轉じて來たので、即ち善人でないものが、善人の眞似をすることを云つたのだが、是に由て見れば、宗教道德の社會にも亦僞物があるといふことが分る。否、宗教道德の社會は、其他の社會よりも、僞物が多くあり易いのである。敢て故意に人を欺かうと云ふのではないが、人に褒められたいとか、自分の熱心を顯はしたいとか、いふやうな野心から、ツイ僞善に陷るやうなことがある。基督は當時のパリサイ人に就て語りて、『彼等は施濟を爲す時、人の譽を得んために、會堂や街衢(ちまた)にて笛を己が前に吹く』とか、『彼等は人に見られんため、會堂や街衢の隅に立ちて祈ることを好む』とか、又は『彼等は斷食を人に見せん爲に顏色を損ふ』とかいふことを言はれたが、斯の如く人に見せんためにする善事は、眞の善事ではない。眞實の善事は沈默するもので、決して自ら吹聽するものでない。基督が癩病人を潔めて、之れを吹聽し、若くは吹聽せらるゝ事を好み給はなかつたといふのは、即ち當時のパリサイ人等の爲したる處を好み給はなかつたので、眞實は沈默するといふ事を自己の摸範に由て、我等に敎へんとせられたのである。我等は敢てパリサイ人の如く、人に見せんために、祈禱をするとか、笛を吹くとかいふのではないが、未だ眞實が足らぬ處から、自ら沈默を守ることの出來ぬ場合がある。又人を判斷するにも、眞實は沈默するといふ事を忘れて、自ら吹聽するものに欺かるゝやうな事がある。故に今此事に就て更に詳細に話して見やう。

眞實は沈默すといふのは、先づ眞實は自然であると云ふ事をいふのである。立派な着物を着て、金時計金鎖、金緣目鏡、金の指環といふやうに金ぐるみて、一見金滿家と見ゆるやうな人は、實は金滿家ではない。却て質朴な風をして、少しも飾つて居らぬ人が、眞の金滿家であるといふ事は、我等が屢々實際に見る處だ。『良賈は深く藏して虛の如くす、聖人は容貌愚なるが如し』と、支那人の云つた言は極端であるが、其中には多少の眞理がある。景氣をつけて商賣が大に繁昌するやうに見せるの

は、實は商賣が繁昌せぬからだ。眞の美人は作らずして自ら美人であるから、敢て作らぬが、醜婦は粧を凝して美人らしく見せやうとするのである。眞の聖人は其德に煩がないから、殊更聖人らしくするものではない、故に愚に見ゆる場合がある。けれ共德のないものは、德がないから務めて聖人らしくするのである。基督信者もやはり同じとて、務めて信者らしく裝ふのは信者の實がないからである。信者の實があれば、自然に其實が顯はるゝのであるから、務めて信者らしい裝をせずともよいのである。諺に味噌の味噌臭さは上味噌に非ずといふ言があるが、信者も其通りである、信者の信者臭さは上信者に非ず。自ら基督信者らしく見せやうと務むる人は、少くとも上等の信者ではない、眞實の信者は沈默するも、自ら信徒たるの實が顯はれて居るのである。

信者や宗教家の中には、自分の祈禱をしたとや、インスピレーションを受けたと抔を盛に吹聽する者がある。何處の山へ登て獨りて祈りをしたとか、水垢離を取つて祈禱したとか、何處でインスピレーションを受けたとか、何時神の聲を聞いたとか、いふやうなことを頻りに吹聽する者がある。余はインスピレーションを受くる事や、神の聲を聞くといふやうな事がないとは云はぬ。又自分の受けた恩寵を證する事は不必要だとは言はぬ。けれ共眞實は沈默す。基督は其爲し給ふた事を人に告ぐる勿れと戒られた。あまりこういふ事を吹聽する人は、何か爲にする事があつてやるのて、實際どうてあるか分らぬ。祈禱會の席上抔で、立派な事をいふ人が、按外あてにならぬ場合が少なくない。斯くいふのは、證明をするとが惡いといふのてはない、唯熱心らしく粧ふ言の中には、眞實がないといふのてある。

リバイバルといふ事も同じとてある。或る人々は之を一種の病的現象てあるかの如くに思つて、非常にいやがる。けれ共リバイバルにも眞僞の二があつて、眞正のリバイバルは、決して厭ふべきものに非ざるのみならず、我等の大に望むべきものてある。而して其眞正のリバイバルは唯泣いたり、騷いだりする者てはない。ムーデ

Iは蘇格蘭に起つたリバイバルの事を記して、『彼等は敬虔の念に滿たされて、森嚴なる沈默に入れり』と云つたが、眞正のリバイバルは、寧ろ沈默するものである。夫の妄りに泣いたり、騒いだりするのは、決して眞正のリバイバルと云ふものではない。元來傳道と云ふものは、靜には出來ぬものゝ如く思ふ者が多いが、基督の傳道は騒々しき者ではなかつたやうである。馬太傳の記者は、預言者の『彼は競ふとなく、喧ぶとなし、人街に於て其聲を聞くとなし』といふ言を引て、基督の傳道を記して居る。傳道さへも、眞實の働は、森嚴なる沈默に由て爲さるゝのである。

眞實は沈默する計りではない、眞實なる人は實に其眞實なるとさへ知らぬのである。健康の人は、其健康なるとを知らぬ。健康不健康抔といふ問題は、健康の人には起らぬ、病氣になつて初めて健康の狀態が分り、不健康の狀態が分るのである。『天才は自ら知らず』といふ言があるが、自分で己れが天才であると思つて居る人に、眞の天才はない。天才は自ら知らぬ、故に自ら天才也と吹聽するともせぬが、世間の人は之を認めて天才とするのである。眞の善人も亦同じ事で、自ら善人なるを知らずして善を爲すのが、眞の善人である。左れば自ら我は善人であると吹聽する人に、眞の善人はない、我は心誠であるといふ人に、誠の心ある人はない。『私の語る事は眞實である』と斷りを云つて語り出す人が、世の中には間々ある。平生眞實を語て居る人なれば、其眞實なるとさへ知らぬ筈であるのに、斯くの如く斷りを言ふ處を見れば、此人は決して眞實を語る人でないとが分る。『私は誠實である』と自ら吹聽する人も、世の中に珍らしくない。けれ共もし誠實が其人の心の常態であるなら、之を忘れて居る筈であるから、殊更之を說明しやうとする人は、誠實のない人であるといふとが分る。眞實は沈默す、虛言を云はぬ人、誠實なる人、善を爲す人は、殊更此等の事を說明し、吹聽する者ではない。故にもし之を說明し、吹聽せんとする人があつだならば、此の如き人は、決して眞實此の如きものでないと斷定して誤はないのである。

親切といふとも同じことで、眞實の親切はやはり沈默する者である。親切らしくする人、口先で親切の事を言ふ人、『私はこういふ親切を人にしてやつた』抔と吹聽する人に、眞實の親切はない。眞實の親切は、親切らしくもせず、又人に親切を盡したとて吹聽もせず、唯事實に於て着々親切を盡すのだ。兎角人は近眼のもので、親切らしき言を述べたり、親切らしくする人に、欺かれ易いものであるが、眞實の親切は沈默するもので、容易に言語や擧動に之を顯はすものでない。世の中には『あなたの事を誰が斯ふいふやうに言つて居るから、氣をおつけなさい』抔と、親切らしく云ふものがある。大抵の人は、此の如き人を親切の人だと思ふものだが、眞實の親切は、こういふやうに自分獨りよい子にならうとする者でない。此方へ來て此方によい事をいふ人は、あちらに往て彼方によい事をいふ人で、親切は愚か、甚だ危險の人だ。眞實の親切は沈默す。我等は口先計りの親切に欺かれざると共に、我等も亦輕薄なる親切に甘ぜざるやうにしたいものである。

今日は廣告主義の盛なる時代で、何でも廣告する。而して其廣告は多くは自書自贊である。新聞屋は何處の新聞でも、己の新聞が、記事が最も正確で、報道が最も迅速で、日本一の新聞であると云つて居る。學校は何處の學校でも、己の學校が最もよい教師を使つて、最も親切に教へる、日本一の學校とは己の學校であるといふやうな事を云つて居る。商賣には廣告も必要である、廣告をするからには、自書自贊も必要に相違ない。併し是とて眞實の價値があれば、自書自贊の廣告は必要でない。況や宗教道德の事に於ておや。基督の取り給ふた主義は、自書自贊の廣告主義ではない、否寧ろ沈默の中に實價を顯はすといふことである。願くは我等、基督が自己の爲したる善事を人に告くると勿れと戒め給ひし深き聖旨を考へ、眞實は沈默するものであるとの眞理を悟り、善人らしくする事や、親切らしくする事や、働き手らしくする事を止めて、眞實善人になり、眞實親切を盡し、眞實神と人とのために働きたいものである。西洋人の言に、『語るとは銀で、沈默するとは黃金である、又語る

事は人間的で、沈默する事は神らしきことである』と云ふたのは、我等の深く翫味すべき言てある。

死者に死者を葬らせよ

又或一人に曰ひけるは我に從へ、彼云ひけるは、主よ先づ往きて父を葬る事を我に容せ、イエス曰ひけるは死たる者に其死し者を葬らせ、爾は往きて神の國を宣めよ（路加傳九章六十節）

基督の處へ說敎を聞きに來た一人の青年に向て、基督は『我に從へ、我弟子となれ』と仰せられた。此青年は近頃新に父を喪つて、未だ葬式も濟まず、悲の中に在つたものと見えて、『先生、私はあなたの弟子になりませうが、先づ宅へ歸りまして、父の葬式を濟まして來たいと思ひますから暫くお待ち下さい』と云つた。基督は容易く此願をお許容になるかと思ひの外、『死たる者に其死し者を葬らせよ、葬式萬端は隣近處の人々がよきやうに取計つてくれるに相違ないから、其れに任せて、爾は直ちに我に從ひ、我弟子となりて神の國の福音を宣べ傳へよ』と仰せられた。此物語を唯此儘に聞くと、基督は親に對する義務を粗末にされたかの如く思れるけれ共、彼は曾て鬼に憑かれたものが、彼に由りて鬼を逐出され、喜に堪えないで、直ちに其の弟子となつて、神の國を宣傳へたいと云つた時、『汝は先づ家に歸りて家人に傳道せよ』と云はれたことがある。又十戒中の『爾、父と母とを敬へ』との言を引て、當時パリサイ宗の人々が、神に禮物を献ぐれば、父母を養はずともよしと云つて居つたことをお叱責になつたことがある。又基督御自身が、如何に其遺れる一人の母に孝養を盡されたかといふ事は、十字架上より、之を其最も愛する弟子のヨハネに托せられた事に依ても知らるゝのである。去れば此『死たる者に其死し者を葬らせよ』と仰せられたのは、勿論親に對する義務を疎略にしてもよいといふ意味ではない。親を愛するは、子たるものゝ義務であるのみならず、自然の人情である。基督は自然の人情に無感覺な人ではない、否最も之を重ぜられた方であるといふ事は云ふ迄もない。故に我等は此言の中に、更に深き、更に大なる意味を發見して之を學ばね

ばならぬ。

此『或一人』といふのは誰であつたらうか。學者の中には之を揣摩臆測して、夫の疑深き使徒トマスであつたらうといふものがあるが、素より臆測で、聖書に名を記してない以上、我等は之を知ることが出來ぬ。誰であつたにしても、基督の此言から推察すると、此青年は父の生存して居る間、充分父に孝養を盡すことをせぬ、父が死んでから、初めて之に心付て、せめて盛な葬式でもして、生前の罪を贖はふとしたやうに見える。『死たる者に其死し者を葬らせよ』。父が死んでから盛な葬式をしたから、それで生前犯した不幸の罪が贖はれるといふ者ではない、葬式の如きは隣近處の人々に任せて居いたからとて差支があるものでないといふのが、基督のお語の意味のやうに考へられる。もし果してそうであるならば、是れ爲すべき時、なすを得べき時に、其爲すべき務を爲さずして、時過ぎ去り、もはや如何ともする事能はざる時に至りて、之を悔ひ、之を悲むものに對する警告である。唯に親に對してのみてはない、夫に對し、妻に對し、兄弟に對し、朋友に對し、盡すべき時、盡すを得べき時に盡さずして、後に取りかへしのつかぬ時に至りて、初めて之を悔ひ之を悲むのが我等の常である。昔時或る貧しき人が貧に迫つて縊れ死んだが、一首の狂歌を殘した。其狂歌は『死んだならたつた壹分といふだらう、生きて居たなら百文貸すまい』といふのである。言語は素より俗であるが、能く人情を詠んだものである。基督は當時のユダヤ人を責めて『汝等は預言者の墓を立て、義人の碑を飾て居る、而して我等もし先祖の時に在らば預言者の血を流すことに與みせざりしをと云つて居るが、現に預言者を苦めて居るではないか』と仰せられたことがあるが、兎に角人は生きて居る時に親切を盡さない、死んでから葬式を立派にしたり、墓を立てたり、碑を飾つたりして、生前に不親切をした罪を償ふとするが、此の如きことに由て罪が償へる者ではない。故に我等は親の生きて居る時に、夫の生きて居る時に、妻の生きて居る時に、兄弟、朋友の生きて居る時に、出來る丈の力を盡して親切をせんければな

らぬ。之を怠るならば悔ゐてもかへらぬ時が來るのであるといふのが、基督の此言の中に敎ふる一の意味であるやうに思はれる。併し此等の人々が既に死んでしまつたならばどうであらうか。我等が怠慢の罪は全く償ふ道がないのであらうか。基督の言に由て見ると、我等の爲に此に一條の活路を示されたやうに思はれる。『死たる者に其死し者を葬らせ、爾は往きて神の國を宣めよ』。死んだ父の葬式を立派に營んだから、それで、生前の罪が償へるものでない、墓所に往て泣いたとて致方もない、けれ共是迄の生活を改めて眞實な、清潔な、高貴な基督敎的生活をするならば、それが何よりの追善供養であるといふのが、此基督の言の意味のやうに思はれる。過去は悔てもかへらぬ。けれ共之より斷然心を改めて、新しき生活に入り、神と人とのために盡すならば、尙多少怠慢の罪を償へるのである。故に我等は既に過去となつたら、徒に罪を悔て泣くよりも、進て新生活をする、神と人との爲に有用なる生活をするやうにせんければならぬ、是れがせめてもの罪滅してあるといふのが、基督が此言の中に於て我等に敎ふる所ではあるまいかと思ふ。

併し此言は是れ計りではない、更に大なる敎訓を我等に與へるのである。即ち高尙なる目的の前には、下等なる目的を屈服せしめなければならぬ、人間第一の義務は、第二の義務、即ち比較的大切ならざる義務のために廢してはならぬといふのが、基督の我等に敎へんとしたる最も大なる意味であらう。『主よ、先づ往きて父を葬るとを容し給へ』父を葬るとは大切の事に相違ないが、人間最大の義務ではない。日露戰爭の時に方て、我等は幾多悲慘の物語を聞いたが、死の床に在る父母を見棄てゝ、戰陣に赴いたといふやうな例は甚だ少なくない。國家の爲といふ大事の前には、今死せんとする父母をも振り棄てなければならぬ場合がある。『私の父が死さうである、私の母が死んでまだ葬式が濟まぬ、私の妻が子を產みそうになつて居る、先づ之を片付けて出掛けますから、どうぞ五六日待て下さい』と云つても、國家は許さぬ。『否、汝は即刻召集に應ぜなければならぬ、即刻出陣せなければならぬ』と云ふ

のである。此の如く大なる義務の爲には、小なる義務を犧牲に供せねばならぬ。神と人との爲めならば、一身一家の利益や幸福は顧みるとは出來ぬ。『死たる者に其死し者を葬らせ、汝は往きて神の國を宣めよ』と基督の仰せられたのは、即ち其意味である。我等が世の中を渡る時には、屢々高尚なる目的と、下等なる目的とが衝突し、最も大切なる義務と比較的大切ならざる義務とが衝突するものである。自然の人情から云へば、高尚なる目的の爲に下等なる目的を棄て、最も大切なる義務の爲に、比較的大切ならざる義務を棄つるは容易のことではないが、斷然小を棄てゝ大に就くと云ふのが、我等の爲すべき處である。今より凡そ三十年計り前、英國ケンブリッヂ大學に、ヘンリーマルチンと云ふ青年があつた。彼は卒業の時には最優等の榮譽を得て、父母や兄弟を喜ばせ、朋友や知人の稱賛を得んとして、勉强した結果、遂に最優等の譽を得た。彼の前途は實に多望であつたけれ共、彼は世の名譽と、人を救ふ神の事業とを較べて、後者の遙に高尚で大切である事を悟て、『神よ名譽ある愉快なる地位は、請ふ他人に與へよ、而して余をして無名にして最も困難の地位に在て安んぜしめよ』と祈りつゝ、印度傳道の途に上つた。名譽は必ずしも排斥すべきものではない、又今日の青年をして悉くヘンリー、マルチンの如くならしむることは能はざるは、云ふ迄もなきことであるが、神と人との爲めには、名譽ある愉快なる地位をも棄てゝ、無名にして困難なる地位に安ずるといふ精神がなければ、基督の弟子となることは出來ぬ。今日信者に取て最も大なる誘惑は多忙と云ふ事である。學生は學問や遊戯や運動に忙しく、官吏や、教育家や、會社員や、銀行家や、新聞記者や、政治家や、商人や、職工や、何れも其業務に忙しい。今日は實に多忙なる時代に相違ないが、世の業務多忙であると云ふ事は、宗教上の義務、靈性上の修養を怠る口實となるであらうか。昔時マルチンルーテルは毎日三時間を祈禱の爲めに費したと云ふが、今日我等の多くは祈禱默想の爲に半時間を費すことさへ出來ぬ。グラットストーンは、毎日曜日必ず教會に出席して神を禮拜したと云ふが、今日の人は多

忙であると云つて、中々秩序正しく教會に出席せぬ。今日の有樣では、宗教と職業といふものは互に反對し、衝突して居るやうであるが、基督が此有樣を見給ふたならば何といはるゝであらうか。『主よ、先づ此仕事をし、彼仕事をし、それから芝居見に往き、クラブに往き、もしも暇があつたら、祈禱をしませう、聖書を讀みませう、教會に往きませう』と斯く申したならば、基督は『俗事は俗人に任せよ、汝は先づ祈禱をせよ、聖書を讀め、教會へ往け』と云ひ給ふてはあるまいか。昔時ユダヤ人は其所得の十分一を取り除けて之を神に獻げたといふが、彼等は自分の生活を後にして、先づ神に獻物をしたのである。今日の我等は自分の生活を先にして、神に盡す義務を後にして居るてはあるまいか。『主よ先づ我飲食衣服遊樂のために、我が得たる金錢を費すを容し玉へ、而してもし餘りあらば、之を汝に獻げん』と云つて居るてはあるまいか。要するに我等は夫の一人の弟子が『先づ往きて父を葬ると を容せ』と云つた如く、下等なる目的の爲めに高貴なる目的を犧牲に供し、第二の義務のために第一の義務を怠つて居るやうな事を、色々の方面に於てして居るのである。基督の我等に求め給ふ所は『死たる者を死し者に葬らせ、汝は往きて神の國を宣めよ』と云ふ事て、信者たるものは必ず高貴なる目的、第一の義務を先にせんければならぬと云ふ事てある。どうか我等は基督の此教訓を尙能く翫味して充分に服膺するやうに致したいものてある。

基督教と貧富の問題

爰に富める人あり、紫袍と細布とを衣て日々奢樂あり、亦ラザロと云へる貧者あり云々（路加傳十六章十九節―卅一節）

米國の牧師コルトンが嘗て、『半ば事實なる事は全體虛僞てあるかも知れぬ、其釣に眞理の餌をつくる程虛僞の成功するとはない、宛も時々正當の時を報ずる時計程よく人を欺くものなきが如く、全體誤つて居るのてない說程人を誤るものはない』と云つたとがあるが、恐るべきは半眞理てある。全く誤つて居れば誰も欺かるゝとは

ないが、半ば眞理があれば何人も之に欺かれ易い。生物學者は一の小さな骨片から、全體の構造を推察し得ることもある。けれ共一部分の眞理は、やはり全體の眞理に比するとは出來ぬ。蚯蚓は之を二に中斷すれば、其各々が完全のものに發達する。けれ共眞理は頭も尾もない蚯蚓と同一視すべきものでない。故に眞理を學ぶものは、半ば眞理なる事を全眞理の如く考へ、一個の原子を完全なる全體として考へてはならぬ。是は凡ての事に於てさうであるが、聖書を學ぶにも亦同樣である。一句を他の一句と離し、一章を他の一章と離して學ぶならば、全體の眞理を會得するとは出來ぬ。故に聖書は全體として之を學び、全體の眞理を會得せんければならぬのである。然るに古來聖書の眞理が往々誤解せられ、唯其半面のみが顯はされたといふとは敢て珍らしいとてはない。殊に聖書の中には、一方に世間的宗教のやうな言があると共に、他方には又遁世主義の言がある處から、基督教は遁世主義の宗教であるかの如く思ふた時代もあつたのである。而して此思想は今でも羅馬教會は云ふに及ばず、新教會の中にも殘つて居るので、中には基督教と文明とは兩立するとの出來るものでないといふやうな考をもつて居るものも少なくない。是は畢竟聖書の半面を見るからで、全體の眞理といふとは出來ぬ。

爰に論せんとするは、基督教と貧富の問題であるが、古來基督教は富に反對する者で、貧乏主義を採用して居る者のやうに思はれて居つたのである。我が教會の總則の中には『永く此教會にあらんとする者は其魂の救はれんことを願へる證據に、華麗なる衣服を着、金銀珠玉の飾を用ゐる事をなす勿れ』といふ一個條があるが、是は當時の惡風を矯正せん爲めに設けられたもので、單に之を衣服は適宜のものを選み、流行を追ふて妄りに華美に流れてはならぬといふ意味に取れば、今日でも結構な規則であるが、若し文字の儘に嚴格に行はねばならぬと云ふならば、基督教は貧乏主義の宗教であると言はねばならぬ。又聖書の中には、『汝地に財を貯ふると勿れ、天に財を貯ふべし』とか、『全からん事を思はゞ往きて爾が所有を賣りて貧者に施せ、

去れば天に於て財あらん、而して來りて我に從へ』とか、『富まんとを欲するは萬惡の根也』といふやうな言があつて、一見富に反對するやうに解せられる。殊に基督の語り給へる富者とラザロの喩話は、基督教は富に反對して貧乏主義を採用するものであるかの如く思はれる。此等の言語や教訓から、基督教は富に反對する者の如く考へて、アントニーやフランシスの如き遁世者が出て來た。それから貧乏主義が基督教の精神であるかの如く思はるゝやうになつたのである。けれ共前申す通り聖書は一句を一句より離し、一章を一章より離すやうな風に讀んではならぬ、半眞理ではない、全體の精神を會得せんければならぬのである。それで余は最も明に富に反對するかの如く思はるゝ此喩話に就て、此問題を解說して見やうと思ふのである。先づ第一此喩話は貧と富との對照ではないのである。耶蘇の所謂貧者といふのは、單に經濟上の意味よりのみ解すべき者ではなく、宗教上の意義、即ち神に向て其心を開く者の謂である。從て富める者といふは、倨傲尊大にして神を恐れず、貧民に對して同情を有せず、其心の甚だ世俗的なる者の謂である。故に此喩話は、貧と富との對照として見るべきものに非ずして、謙遜と倨傲、敬虔と世俗的との對照として見るべきものである。神の敵は富ではない、世俗的である。神の友は貧乏ではない、敬虔である。爰にいふ貧富は、單に經濟上の問題ではない、寧ろ宗教上の問題である。此喩話を以て基督が富に反對する者の如く思ふは、聖書全躰の意義に通せざるのみならず、此喩話さへ解する能はざるものである。然らば基督は貧富の問題に就ては何事をも教へられなかつたかと云ふに、勿論基督は當時の經濟上の問題には容喙し給はなかつた。けれ共貧富に關する根本的主義をば教へ給ふたのである。之を一言にして云へば、吾人の有する富は吾人にのみ屬すべきものでない、吾人は富の所有者に非ずして管理者であるといふのが、基督教訓の土臺に在る思想で、既に管理者であれば、之を自己の利益や快樂のために費すべき者でない、之を神の物として神に捧げ、神の聖意に從て有用に費さなければならぬといふのである。夫の

不義なる操會者の喩、及び此富者とラザロの喩は即ち之を敎へたもので、此喩話に在る富者の罪は、其富を自己の所有として自己の豪奢の爲めに費し、貧者に向て何等の同情をも表せなかつたといふ點に在るのである。富が神の敵て、貧が神の友てある抔といふことを敎ふるものではない。否基督が貧究困苦の苦痛を極言し給ふたのは、畢竟貧究困苦を救はんとし給ふたが爲めて、此點から考ふれば、基督は貧苦と戰ひ之を滅ぼさん爲めに、最も强大なる努力を爲し給ふたと云はざるを得ぬのてある。

此喩話は今云ふ通り一方に富者に對して、神を畏れ、其富を神の聖意に從て費さねばならぬといふ事を敎へたので、富者に對する福音てあるが、貧者に對しても亦敎訓を與へて居るのてある。此喩話のラザロは、死して後天使に携へられて陰府に往き、アブラハムの懷に抱かれて居つたといふが、此の如くよき應報を受けたといふのは、前にも云ふ通り、生きて居つた時貧しくして苦んだ爲めてはない。敬虔にして神を畏れたがためてある。誰が此世に於てラザロの如く、貧しくして、剩へ腫物を患へ、富める人の門に置れ、其案より落つる餘屑にて養はれ、犬に其腫物を甜めらるゝことを欲するものがあらう、是は素より我等の望むべき所てはない。我等が彼に學ぶべき處は、其貧しくして苦めるとてはない、其敬虔にして神を畏るゝとてある。此喩話に顯はれて居る所に就て、我等の學ぶべきことが二つ三つある。今成るべく簡短に之を述べて見やう。

先づ第一は、彼が貧苦の中に在るに拘らず、聊かも神に向てつぶやいたといふ形跡のなきとてある。貧苦は我等の望むべき處てはないが、色々の境遇から我等は貧苦に陷るやうな場合がある。假令ラザロ程の貧苦に陷らずとも、生活上隨分苦心をせねばならぬやうなことがある。此場合に臨て大抵の人はつぶやくのてある、神を怨むのてある。而して其結果自暴自棄に陷り、所謂貧すれば鈍するといふやうになる。然るにラザロは秋毫此の如き形跡がなく、顏回が一簞食一瓢飲在陋巷不改其樂的の

有樣あり、保羅が『我富厚に居るの道を知り、又究乏に居るの道を知る』と云ひしが如き有樣がある。彼が死して後天使に携へられ、アブラハムの懷に送られたといふのは此敬虔の念があつたからである。

それから又ラザロは貧苦の中に在て、唯に神に向てつぶやかぬのみならず、人に向てもつぶやかなかつたのである。彼は聊も富者を怨み、之を咀つた形跡がない。大抵の人はラザロ程の貧苦に陷らずとも、自分が貧乏をすれば、富める人を妬み之を咀ふ者である。ヨハネ兄弟が基督に向て『一人を爾の右、一人を爾の左に坐らしめ給へ』と云つた時、基督は之に答へて、『我右左に坐るとは我が賜ふべきに非ず、只我父に備へられたる者は賜へらるゝのみ』と云はれたが、凡ての事神に備へられたる者は與へらるゝので、我等自ら與へられぬとて、與へられたる者を妬み又は咀ふ筈はない。ラザロは非常の究乏に陷りたるに拘はらず、又此富者は更に之に向て同情を表せなかつたに拘はらず、聊も之を怨むやうな心がない。從て陰府に入て後苦樂其處をかへ、富者は火焰の中に苦むと云ふやうな有樣に陷つたけれ共、之を見て竊に喜ぶといふ樣な事をもせぬのである。此心が即ち善き報を受けた所以で、我等の學ぶべきは此點である。最後に一つ申して置きたい事は、前述べた如く基督教は富に反對する宗教ではない。否神の與へたる力量に從て富を造り、之を神の聖旨に從て使用し、以て貧究と困苦とを救ひ、人生を愉快幸福にするといふことが大切のことである。從て身分相應の生活をするといふ事は毫も咎むべき筈のものでない、流行を追ひ妄りに華美に流れ、更に貧しき者苦める者に同情を表せざるは、クリスチャンの爲すべき處ではないが、身分相應の事をするならば、他人が之を彼此批評するには及ばぬのである。從來の基督教會の惡弊は此點に關し、あまりに貧乏主義に傾いて、稍もすれば貧乏を奬勵し、少し立派な衣服でも着、愉快幸福な生活でもする者があれば、兎角神の道にても背くかの如く思ふて、非難する傾向のあるとである。今日の文明、殊に米國風の文明には許多の惡弊もあらう、我等は悉く之に贊成する

とは出來ぬが、サリトテ基督教會が何時までも中世の貧乏主義を採用して居るならば、今日の文明には無用のものとなつてしまふのであるから、我等は此等の點に就て、充分聖書の眞意を會得して其全眞理を傳ふるやうにしなければならぬのである。

精神的引力

我若し地より擧げられなば萬民を引て我に來らせん、（約翰傳十二の卅二）

又爾曹をして愛に根し愛を基として凡の聖徒と共に測るべからざるキリストの愛を知り、其廣さ長さ深き高さを識らしめ又神に滿てるものを爾曹に滿しめ玉ほんこと也、（以弗所書三章十八、十九節）

宇宙間に在る物體は、其大小遠近に從て互に牽引するもので、之を引力の法と云ふ。世人は曾て、物は孤立獨存する者で、互に何等の關係あるに非ずと思つて居つたが、今より凡そ二百年前ニュートンが出てゝ、引力の法を發明し、物は孤立するに非ずして、相引くもの也との事を明にし、學術界に大なる貢献を爲したのである。之と同じ樣に、精神界にも亦引力の法がある、之を發明したのは耶蘇基督である。基督以前に在ては、人は孤立獨存するものと思はれ、猶太人は猶太人、希臘人は希臘人といふやうに、互に反目して居つたのであるが、基督が出てて、世界人類の一なる事を敎へ、人は個々に孤立すべきものに非ず、假令貧富貴賤の差あり、人種、國民の別有りと雖も、互に相愛すべきものであるといふ事を明にせられた。此事が明になつて、精神界は大なる光明を得、一大革新を起して來たのである。

精神界の引力とは、云ふ迄もない愛である。引力の法に從へば、物の引力は其大小に由るので、大なる物體は小なる物體を引くのである。例之夫の太陽は、八箇の遊星を引て、其周圍を回轉せしめて居る。是れは、太陽が遊星に比すれば過に大きく、從て偉大の力を有するからである。之と同じく精神界に於て偉大なる人物といふのは、引力の强さ多を人をいふのである。太陽が八箇の遊星を引付けて、其周圍を回轉せしむる如く、多くの人を自己の周圍に引き付け得る力を有する人が、眞に偉大の人物である。而して此人を引く力は、勿論愛である。權威や、腕力や、金錢や、其外

籠絡手段も人を引かないのではない、けれ共是は一時で永久に人を引くものではない。

『我若し地より擧げられなば、萬民を引て我に來らせん』とは基督の言で、當時之を聞きたる人々は、勿論之を了解するとが出來なかつた。然るに此言の眞意は漸次了解せられて來た。彼は實に世界萬民を引て、己に來らせつゝあるのである。宛も太陽が衆星を牽ひて其周圍に回轉せしめつゝある如く、義の太陽なる彼は、萬民を牽ひて己を崇拜せしめつゝあるのである。彼は唯に其言語に由て引力の法を敎へられしのみならず、其一身に於て之を明にせられたのである。彼の性格に就ては、色々の議論もあらう。基督敎とは何ぞやとの問題は、今以て盛に論じられて居る。從て基督信徒の要性に就ても、多少の議論があらう。併し基督は渾身愛の人で、彼は其戒として唯『爾曹互に相愛すべし』と敎へられたといふとは何人も疑ふとは出來ぬ。去れば基督敎は愛の敎で、基督信徒は何よりも先づ愛の人でなければならぬといふ事は明である。換言すれば、我等は基督の如く引力を有すべきもので、引力の多少は、即ちクリスチャンの價値の分るゝ所である。

使徒保羅の以弗所（エペソ）の信徒に贈りたる書簡の一節は、此敎訓の註釋となすべき者である。彼云く、『爾曹をして愛に根し、愛を基として、凡ての聖徒と共に測る可らざる基督の愛を知り、又其廣さ、長さ、深さ高さを識らしめ、又凡て神に滿てるものを爾曹に滿しめ玉はん事也』と。我等は基督の愛を知り、之を我等に滿さなければならぬ。其基督の愛は樣々の方面より研究すべきであるが、保羅は爰に彼の愛に廣、長、深、高ありしやうに云つて居る。是は我等の注目すべき處で、凡て完全の愛、多くの人を長く引く力を有する愛は、此の如き愛でなければならぬ。今我等は此方面より愛を研究しよう。

先づ愛には廣さがある。夫の太陽は最も遠方に在る海王星、三十七億萬哩隔て居る遊星を引て居る。此の如く最も大なる愛は、廣くして遠くに及ぶものである。唯に

親類朋友を愛するのみでない、又唯に同人種、同國民を愛するのみでない、異人種、異國民でも己に敵し、己に害する者でも、尙之を愛するのである。基督の愛は、實に此の如き愛であつた、而して彼は又我等に命じて、此の如くせよと仰せられたのである。然るに我等は、兎角階級的僻見や、宗教的僻見に支配せられて、愛の區域を狹めて居るので、我等の愛の範圍は誠に狹いのである。我等に引力のないといふのも尤の次第である。

次に愛には長がなくてはならぬ。長き愛とは永續に續く愛である。我等の愛は兎角一時限りて、近く相交て居る時には、愛心が盛に燃えて居つても、一旦遠く相分るれば、去るもの日に疎しといふ諺の如く、其愛が冷えてしまふ。又近く相交り、相愛して居つても、些細の事から感情を傷けたり、相爭つたりして、兎角交情が長く繼續せぬ。基督の愛は之と異つて居る。例之彼得が彼の非運に臨て、彼を棄てゝも、彼の彼得に對する愛は尙衰へぬ。彼が顧みて彼得を瞥見した其眼には、云ふ可らざる愛を湛えたのである。故に彼得は彼の無言の愛に感激して、其罪を悔改めたのである。我等は兎角人の我等に對する態度に依て、變じ易いのであるが、完全の愛は、他の態度の如何に拘はらず永續するのである。

又愛には深さがなくてはならぬ。深い愛と云ふのは、心の底から愛するので、人のためには、時間も勞役も金錢も生命も犧牲にする愛である。基督が疲勞をも飢渴をも忘れて、サマリアの一賤婦に道を說いたのは、其深き愛からである。彼がラザロの墓前に立ちて、一滴同情の涙を灑いだのは其深き愛からである。彼が學者パリサイ人の反對をも迫害をも顧みず、稅吏罪人と交り、病者を癒したのは其深き愛からである。否、彼が其身を十字架に掛けて、犧牲となつたのは其深い深い愛からである。彼が强い强い引力を有するは、此實に深い深い愛に由るのである。顧みて我等の愛を見よ、實に淺い、底の見えすいた愛である。こんな愛で何て引力があらう。

次には愛の高である。愛の高とは愛の動機をいふのである。何處から同情の愛が出

て來たか、其源がどれだけ高いかと云ふとである。同じく人を愛する如く見えても、其實利己心から、卑い心から出て居る愛がある。例之歴山王やナポレオンも能く其士卒を愛したのて、彼等が如何に士卒を愛したかを示す美談が傳へられて居る。けれ共彼等は決して其士卒を愛する心から愛したのてはない、唯自分の功名心を遂ぐる用に供せんが爲めに、恩を賣つたのてある。我國の政治家にも子分なるものがある。彼等は衣食又は金錢を與へ、若しくは最愛の娘をやつて、子分を養ふのてあるが、其目的は必要の場合に、自己の用を爲さしめんがためて、彼等を愛するからてはない。眞の愛と云ふのは愛の爲めに愛するのて、愛は目的で又手段てあるのてある。此の如き愛が即ち基督の愛て、高を有して居る愛といふのてある。眞に引力ある愛は又此の如き愛てなくてはならぬ。

基督の愛は以上云つた如く、廣長深高を備へたる愛て、其廣長深高は測る可らざる程てあつたのてある。彼が測る可らざる引力を有するのは、實に之が爲めてある。

我等が彼に來りたるのも、畢竟此引力に引かれたのてあるが、我等もどうか此愛を學び、其長廣深高を備へて多少の引力をもつやうにしたい、夫の地球が太陽に引かれて其周圍を回轉しつゝ、一箇の衛星を引き付けて其周圍に回轉せしむる如く、我等も基督に引かるゝと共に、人を引きたいものてある。

基督教安心論 終

明治四十一年二月十日印刷
明治四十一年二月十五日發行

基督教安心論
定價金七十錢

著作者 高木壬太郎
發行者 東京市京橋區中橋廣小路六番地 前川又三郎
發行者 東京市京橋區五郎兵衛町廿三番地 杉本要
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 佐久間衛治
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

東京市京橋區中橋廣小路六番地
發兌元 梁江堂
（電話本局五百七十七番）

不許複製

藏版圖書一覽

梁江堂發兌圖書發賣元

東京市神田區表神保町　東京堂書店
東京市神田區裏神保町　上田屋書店
東京市日本橋區吳服町　北隆館書店
東京市京橋區尾張町　東海堂書店
東京市京橋區中橋廣小路　前川文榮閣
大阪市一東區南渡邊町　杉本書店
京都市烏丸佛光寺東入　東枝律書房
名古屋市本町二丁目　川瀨書店
名古屋市玉屋町　星野文星堂
久留米市米屋町　菊竹金文堂

近刊豫告

神學博士　三並　良先生　安倍能成先生　合譯

オルデンベルグ氏 佛陀傳

菊判布綴約五百頁
定價　未詳
郵稅　未詳

讀書子乞ふ眼を潤ひて飜譯界を見よ、日々學界に現はるゝの譯書寔や汗牛充棟も只ならず、而も皆是れ隨々たる小冊子のみ、其の幾千の中眞面目に諸子を益するの書果して幾干かある。本譯者神學博士三並良、安倍能成兩先生是を慨するや久し、今や彼の獨乙東洋學者のオーソリーティーたる、オルデンベルグ氏の佛陀傳を拉し來りて、縱横叙說し原始佛敎の大觀を細說して以て遺憾なきに至らしむ。見よ原著者は已に東洋學者として喧々の譽あり、譯者は本邦神學家中屈指の神學博士三並先生たり、彼此兩々相俟ちて本書の如何に光明を斯界に垂るゝかを。初めて本書飜譯の企あるや、譯者は親しく原著者の承諾を經て、其の最新版たる千九百四年刊行の第四版に則り、最も精密に最も嚴格に原書の意を害はざらん事を務め、多年の蘊蓄を傾け盡して今や漸く大成せり。由來本邦の佛敎研究たるや、概れ北方佛敎にのみ傾き未だ嘗て南方佛敎を舒述せしものあるを聞かず、本書は彼の錫蘭島に傳來せる「パリー」の經典に基き、主として南方佛敎を闡明したれば、我邦斯學者に取りて如何に其益することの大なるやは發行者の期して疑はざる所なり。其の內容の一端を語らんか、第一篇緒言に佛敎以前の印度宗敎及び哲學の大勢を簡舒して佛敎の依て來る淵源を明かにし。第二篇佛陀篇には佛陀一代の傳記を述べ。第三篇に於て佛敎々理を細叙詳論し最後第四篇に佛敎々團を細說して論を結ぶ。考證は精密に、說論は明快に、縷々數萬言原始佛敎の大觀は本書を俟つて始めて本邦に紹介せられんとす。大方の佛敎研究に志を致すの子よ、乞ふ本書を常に座右に供して、以て卿等が最良最高の師友と一給へや。

綱島梁川先生著　好評第七版

病間錄

新裝クロース綴箱入頗美製本
定價金壹圓
郵稅金拾錢

本書は多年內鑠の病に臥したる著者內生活の實錄也最も熱烈なる煩悶を經て最も光輝ある感應を得たる心靈の活史也時代の要求に觸れて時代を超越せる神秘久遠の海潮音を傳ふる一種の近代的默示錄也此書一たび出て我文壇及思想界の波瀾高く揚り大方の批評集まり尨然一卷を成せり今や七版刻成る江湖の諸君子幸ひに購讀の榮を賜へよ

綱島梁川先生著　好評第三版

回光錄

病間錄同裝箱入
著者肖像一葉入
定價金壹圓貳拾錢
郵稅金拾貳錢

『病間錄』は著者が病床に於ける恒久にして熱烈なる煩悶史也自力奮鬪向上精進の目くるめき足よろめく嶮坂危磴を窮め盡して正に彼の「見神の實驗」てふ光輝ある眞理の第一峯は聳へ出てたり。而して此の赫耀たる眞理の第一峯上に立ちて悠々として靈界無邊の光景を眺めわたしたるもの即ち『回光錄』一篇の消息也、渴仰熱慕の境より讃美頌榮の境に達したる著者要求悲哀の域より歡喜信樂の域に進みたる著者自力健鬪の生活より他力感恩の生活に移れる著者凡て收めて『回光錄』一卷の中に躍々たり法悅と健鬪とを合せ得たる靜寧にして而も積極的なる著者の面目と其靈生活の消息を知らんと欲する者は希くは來つてこの『回光錄』一卷を繙讀せよ

聖書物語の完成

中村春雨君著
小林千古君畫

新約物語

三色版六葉泰西名畫廿四葉
四六版形布綴箱入美本
定價金壹圓送料十錢

聖書は世界の一大奇蹟である、又一大寶庫である、眼一たび之を讀む者は普く方寸の天地に日も星も山も河も大宇宙の森羅萬象悉く疊み込まれてあるに驚き、足一たび其中に入るものは心は悸前にも後にも金碧燦爛、右にも左にも光明赫奕、目くるめき、心くこの惑にに打たるいてあらう。

大寶庫の錠を開くはなかなか容易なる事ではない、否一つの謎を解き一大奇蹟の謎が解ければ更に又一つの扉が開いて居、奥の謎がかゝり一つの錠を開けば更に又一つの扉が閉つて居、奥の謎がかゝ

ばの味は愈深く、且つ遠く無盡藏である、老幼婦女子は只一遍二遍通讀した位ては、その大略の筋さへ會得が出來ぬ、況んや四角な楷書から圓い平假名に書きくづして誰にでも讀み易くし散らばつた珊瑚珠を一つ

かゝる、やうに編み上げた心書は通俗の旨とし學者にも大人にも又老幼にも婦女子にも舊約の算である（新約物語の序の一節）

舊約物語

三色版六葉泰西名畫廿四葉
四六版形布綴箱入美本
定價金壹圓五十錢送料十錢

中村春雨君著
木下繁君畫

基督を善く了解せんとするにはどうしても舊約全書の新約全書の基督を善く了解してかゝられぬ、否舊約全書の一頁一頁を最も善く咀嚼し消化して自分の身體の新しい血となし自分の靈の新しい力としたのが即ち基督である。

基督は即ち舊約全書の扇の樞軸である、百川の注ぎ入つて茫洋たる一大海洋である、基督なくしては舊約全書は深く湛え高く動く一大海洋である、基督なくしては舊約全書は唯一箇の稗史戯曲を讀む以上の興味を與へないものに了ると同時に舊約全書なくしては基督は何故に生れ、何故にかく言ひ、何故にかく行ひしか、その大自覺、その人間以上の人間、神の人たる所以を解するに苦しむ節々が少くない

あらう、所詮新約と舊約とは親と子との關係がある、血と肉との離れられぬ間柄である、イスラエル民族が遂に基督を生み出すに至つた所以の深く且つ遠いのを了解し得て始めて完全なる基督教の智識を得る事になる、併し此書は前の新約物語と同じく通俗を旨とし學者にも大人にも又老幼にも婦女子にも舊約の概略を知り得らるゝやうの趣向で、歷史の糸を辿つて編んだ手引たるに過ぎぬ（舊約物語の序の一節）

家庭通俗の聖書

早稲田大學講師　五十嵐力先生譯補

兒童の研究

人の性格の固定するは兒童教育の眼目なり後來の教育の根本實に兒童教育にあり兒童の心理の發達に應じて相當の教育を與へて正道に導くは父たるものゝ務なり著者夙に兒童の研究に心を傾け孜々として之に努む此著は其研究の一端を示せるに過ぎずと雖も精緻なる觀察と穩健なる判斷とは兒童訓練の正しき道を知らしむるに適せり子を持てる親、子を預れる教師人性の芽生に美しき枝振をなさしめんとする人は此著を讀み玉ふべし

クロース綴美製本
定價金壹圓
郵稅金拾錢

文學博士　建部遯吾先生著

靜觀餘錄

水城建部遯吾先生は我國社會學者の泰斗にして、而も思索家として一流の士なり。堅固なる實論の上に立ちて深邃なる沈思に耽る、冷かなること水の如くにして透徹玉を欺き、掬めば玲瓏の響を爲す。之れ靜觀の本義なり。犀利なる觀察は事物の眞に徹底し、不壞なる信念は質實の學理を以て固く、人事と天然の混沌は這の手裏にありて一抹の翳をも殘さゞらん、之れ靜觀餘錄の滋味なり。世の徒らに高く安りに說き誤りて導く流ならざるを諒せよ。

クロース綴頗美裝
定價金壹圓貳拾錢
郵稅金拾錢

海老名弾正君著

潮新海靈

クロース綴箱入美本

定價金八拾錢

郵税金八錢

今日の青年よく戀に悶へ生活問題に腦む、而して彼等よく煩悶を大呼すと雖も人生の深刻なる宗教的動機より來れるものにあらずして一喝驚死せしむべき不健全の煩悶にあらずや。著者は講壇に於ける最も古き人なると、基督教の宣傳に日夜孜々として努めらるゝの人たるは世の既に知るところ而して此の書は著者が天下に向つて號叫せる最大説教を輯めたるものにして現代宗教上の實際問題に就ての解釋を試み其の根本の要義を提示せるもの也

目次大要……煩悶論……約百記論……人生の重荷……幸福とは何ぞや……如何にして眞理を知るべき乎……基督なき人……物外の意義……遇と不遇……忘却論……秩序ある生活……豐富なる活力……不平論……標準論……自己教育……自由の律法……神の律法と人の律法……善き人と有用なる人……聞かるべき祈禱……復活に於ける一緊要と不緊要……基督教徒の證據……無名の弟子……眞實は沈默す……死者に死者を葬らせよ……基督教と貧富の問題……精神的引力……等必讀の名文字

高木壬太郎君著

基督教安心論

新刊

定價金七拾錢

郵税金八錢

清澤滿之先生著

懺悔錄

クロース綴美裝

定價金七拾錢

郵税金拾錢

(時事新報評)白河派の領袖として多年鬱結せる本山の陋習を打破せんと試みたる教壇の勇士清澤滿之氏の遺著なり、臘扇日乘、隨感錄、在床懺悔錄を輯む、この篇に横溢せる熱心敬虔の情は讀むものをして感服せしめずんば已まず、氏の信仰には普通の俗僧輩の蠢愚の見を破して一心光明と相連り隻手を打げて菩提地を摩し去らむとするの概あり、臘扇錄の劈頭「如來の奴隷となれ、其他の奴隷となること莫れ」と喝破するところ素讀魔信の徒を戰慄せしむる覇氣、才氣、元氣ありて而かも德性の剛性を加ふ一面に詩人的狂熱を有するところ氏の人格を見るに足るべし

浩々洞同人著

沈思錄

クロース綴美裝

定價金六拾錢

郵税金拾錢

外に大に活動せんと欲せば、內に大に沈思する所なかるべからず外に大に發展する時內に靜慮する所なかるべからず、明治三十七八年の戰役は我國民の大活動なりき、大發展なりき、この大活動、大發展の際に當り、沈思瞑想、常住の靈光に接觸し十方無碍の靈能を感得し來りし、浩々洞の諸師が自ら安んじ世を救はんがために記述せられたる時々の感想を錄したるを本書とす。名利と愛惡に悶ゆる現代の青年諸君よ請ふ汝の思考の題目を淸淨ならしめよ、汝はその熱湯を飲むが如く煩悶の中に本書を繙いてその淸涼の氣に觸れ以て宇宙の大靈の救濟に接し安住の天地に入らんとはせずや。

浩々歌客著

心錄

四六判洋裝
定價金六拾錢
郵稅金六錢

文藝、宗教、社會に能く人生の情理を曲盡したる浩々歌客の文集也、現代文壇に獨步する達觀明識、異彩ある雄麗高華の文章は收めて此の鷗心錄に在り。伊吹郊人の名を以て詩壇の耳目を聳動したる比興詩論邦人の未だ曾て指を染めざる北歐芬蘭文學の消息、劍南道士の名を以て堂々の筆陣を張りたる時文、小品、紀行數十篇、蓋し江湖讀書社會の多々益々味ふべき絶好文字也。

堺枯川君著

婦人問題

四六判洋裝
定價金四拾錢
郵稅金六錢

著者は現今社會主義者中の錚々たるものにして、また家庭問題、婦人問題に關して此主義の上に立つ一家の見を有す。本書即ち賢母良妻主義、自由戀愛、婦人と選擧權等婦人を中心とする現今の諸問題を評論し婦人諸君の覺醒を求めんとするなり。現時の婦人が其奴隷的屈從の地位を脫して、政治上、社會上に男女平等の權を有する將來の自由なる社會に向つて進まれんことは蓋し著者の希望なり。

安部磯雄君著

理想の人

四六判洋裝
定價金七拾錢
郵稅金八錢

著者が口に筆に修養を說くもの玆に二十有余年、今や倫理、宗教、教育、家庭、社會の五方面より『理想の人』を論じて聊か修養の道に資する所あらんとす、人は理想の政治家、教育家、文學家、藝術家、實業家たる前に先づ『理想の人』たらざる可らず、高尙なる士君子と養良なる市民の眞面目を發揮して僞英雄似而非成功家を排斥し虛僞虛飾の貴族的道德を痛罵して眞摯純朴の平民的道德を皷吹する所著者の言論殊に痛快を極む。

山路愛山君著

支那思想史

四六判洋裝
定價金四拾五錢
郵稅金六錢

此篇著者平生の蘊蓄を傾けて東洋精神界の英雄を評論す。簡にして明、約にして要を得たり。附するに日韓文明異同論を以てす。支那歷史の要點は此に盡きたりといふも亦可なり。自家の妍媸、自家知る。東洋の思想は東洋の人自ら解釋せざるべからず。著者の此論を懷くや久し。此書則ち之を實にするものゝ一也。

山路愛山君著

社會主義管見

四六判洋裝
定價金參拾錢
郵稅金四錢

是書は山路愛山先生が其主義を發表せられたる大論文也、語は平易にして意は深く全卷假名付にして何人にも解し易からしむ、想ふに第廿世紀の問題は自由主義對社會主義に外ならず乞ふ現代を解釋せんとする人は此書を座右に備へ給へ。

木下尙江君著

懺悔

四六判洋裝
定價金參拾五錢
郵稅金六錢

戀に惱み死生に惱み功名心に惱みたる著者が始めて人生の奧義に觸れて奮然新生活に驀進せんとするに當り既往を回憶して赤情を吐露したるものをこの一篇とす、これ實に著者が過ぎし苦悶の告白にして又新に挑まんとする難戰の宣言也。

325
40

325
40
Ⓜ

020425−000−5

325−40

基督教安心論

高木　壬太郎／著

M41

ABI−0234